

梓が間に入った。

「私も退職願いを提出していますが、社長は受理してくださいましたよ。総務部長、内観さんには人に話せない事情がおありなのでしょう。社長にはありのままを報告されたらどうですか？」

総務部長は考え込んでいたが、首を小刻みに振って頷いた。賢は自分の席に戻った。

終業時間になると、賢は康子とふたり、地階の駐車場で梓が来るのを待った。梓は小走りでやって来た。

その日のムクウの話は「意識の集中方法について」だった。既に賢は意識を極限まで集中させることができるようになっていて、ムクウは賢のように意識を集中させてゆくための、いくつかの手段を説明した。ひとつは訣と言うものだった。それはひとつの言葉を繰り返し唱えることで、5臓が同調し、体が完全な集中状態になるというもので、いつも引切り無しに雑念が起きているような普通の人間を指導するときに必要なことだと言った。訣にはいろいろなものがある。一般にはマントラといわれる暗号のような言葉だと言った。胎音という母親の胎内にいるときに聞いていた音に近い音を組み合わせたものが非常に有力だが、そのほかにも五臓が共振しやすいような音、瞑想によって見出した宇宙の原始音などさまざまなものがあると言った。そして、その例を示してくれた。ムクウは「これらの訣はあれこれ変えてはならない。ひとつの訣を決めたらそれに集中しなくては、効果は期待できない」と言った。訣を唱えるときは、眉間の上丹田に意識を集中するのがいいが、あまり意識レベルの低い者がこれをやると、偏差という異常な状態を招き、発狂したり、ひどい場合は死に至る危険性もあると言った。それを避けるために、修行者は間接的に眉間のセンターに集中するのがよく、上丹田を通して下丹田などのセンターを望み、そこに訣を生じさせる方法がよい。訣は5臓に響き渡るように意識する必要がある。心で念じ、肺から発し、腎で聞き、肝で観じ、脾で統べる。それが結果として意識に作用する。これが意識集中のひとつの方法で、そのほかに呼吸法を通して、意識をセンターに集め、それを集中させる方法も説明してくれた。これは賢が嘗て

学んだ。白隠禅師の南素の法にも通じる方法であり、胎息を用いる方法である。この方法を通して心と体を沈め、そして、集中させるのである。また、歌を通して意識を螺旋状に周回させ、ひとつの点に収束させる方法もあると言った。これはバウルが行っている方法だった。しかし、やはりもっともシンプルで確実な方法は、瞑想状態ですべての思考を俯瞰し、あらゆる思いが通り過ぎるのを待ち、何も現れなくなったら、一本の銀の糸の上に意識を載せて、源まで降りてゆく方法である。これは賢がしばしば用いる方法だった。これらの秘法を賢はムクウから僅か3時間の間に伝授された。しかし、賢は自分の意思で、何時でも意識を通常の1000倍以上集中させることができるようになっていて、これはムクウの伝授してくれたいずれの方法にも通じるが、似て非なるものでもあった。意識の集中が自己を本来の自己に導く手段であるということを賢は改めて認識した。ムクウとの通信を終えると、賢は一日の省察を行って床に就いた。

翌朝5時に目を覚ますと、亜希子が机の前の椅子に腰掛けていた。

「あなた、こんばんは・・・あつ、いいえ、おはようございます」

「亜紀、早いな。食事はしたの？」

「はい。昨日と違い、ホテルで食事ができました」

「今日はどうだった？」

「はい、あなたのおかげで、体が軽くて・・・曾我野さんと一緒に貧しい生活をしている人たちの住む村に行きました。曾我野さんは、その村の男の人たちを指導して井戸を掘っていました。わたくしは病気で寝ている子供を見て廻り、薬で治りそうな子供には薬をあげ、不衛生が原因で発病したと思われる家では掃除を手伝って、病人の身の周りを清潔にしたりしました。5軒ほど廻りました。少し疲れしました」

「大変だったね。体が汚れていて、直ぐにシャワーを浴びたいだろうが、あと1時間半でみんな出てゆくから、それから浴びるといいよ。また昼・・・君にとっては朝だけど・・・戻って来るから待っていて。それじゃあ交代しよう」

そう言うと賢はベッドから降りて、簡単にベッドメイクをし、亜希子を

抱きしめてから、亜希子にベッドに横になるように促した。亜希子は疲れはあったが、賢のやさしい扱いでそれも直ぐに吹き飛んでしまった。亜希子は直ぐに寝息を立てて寝入ってしまった。賢はそっと身支度を整えると部屋を出て洗面所に向かった。梓が居た。

「おはようございます。あなた、お部屋から女性の声が聞こえてきたようでしたが・・・」

「梓、誰にも言ってはだめだよ。康子にもね。僕の部屋には午前中、亜希子が眠るために来ているんだ。エチオピアの田舎のホテルの環境があまりにも酷すぎるんだ。病気になるといけないから、テレポさせているんだ。何も知らないことにしてくれよ」

「分かりました」

梓はそれ以上聞こうとしなかった。そこに康子が来た。

「おはようございます。昨日はよく休まりました」

「康子さん、今日は私の番ね。あなた、お掃除をお願いしますね」

康子は頷いた。

食事を終わると、賢は寝室に戻って亜希子を起こした。眠そうな目をこすりながら亜希子は起き上がった。3人が家を出ると、亜希子はベッドから降りて洗面所に行った。鏡に映る自分の姿を見て驚いた。顔は汚れていて髪も艶を失っている。少し日焼けしているようだ。曾我野も賢も何も言わなかったが、はっきりと分かる黒い汚れが頬にこびり付いている。亜希子はレポートする前に着替えたばかりの衣類を脱ぎ、シャワーを浴びた。顔の汚れを落とすことを特に意識した。自分の体の上を流れる水は身も心も清めてくれるほど心地よかった。シャワーが済むと、直ぐにベッドに戻り、また眠りに落ちた。

この日も賢は昼食時間になると行き先掲示板に「外出・NR」と書いた。出掛けようとする、康子が言った。

「内観部長、お昼はどうされますか？」

「うん、ごめん、今日もちょっと寄りたいところがあるんで、一緒に食事はできないんだ」

康子は頷いたが、どことなく寂しそうだった。賢は支社から少し離れた

ところにある宅配ピザ店に行き、注文しておいたピザを受け取ってから路地に入り、そこでテレポーテーションした。亜希子は目を覚ましていて、顔を洗い、化粧も済ませているのがはっきり分かった。いつもの美しい顔に戻っていた。

「亜希子、化粧道具なんかも持ってきたのか？」

「ええ、ほら、ご覧になって」

亜希子は左手で小さな水色のポーチを持ち上げて見せた。ポーチの色と指輪の色がマッチしている。賢は亜希子を可愛いと思った。

「今日はピザを買ってきたぞ。朝からピザじゃ、ちょっときついか？だけど、亜希子の好きなサラミとトマトのピザだよ。リビングに行こう」

「あなた、わたくしはアフリカに居るんですよ。ピザでしたら、朝でも昼でも晩でもいつでも大歓迎です。でも、あなたの好きなマルゲリータピザになさったらよろしかったのに。わたくしはあなたの好きなものが好きなんですから」

ふたりはピザを楽しんだ。亜希子が話をした。

「由宇お姉さまが、わたくしのことをとっても心配してくださるのです。わたくしはとっても幸せです。つらいときはこの指輪を見ることにしているのです。大好きなあなたと由宇お姉さまのことを思い浮かべると、それだけで元気が出てきます。キガリに居るときには、由宇お姉さまがいろいろなお話をしてくださります。フルマのこと、それから近頃はおなかの赤ちゃんのこともお話になります。大分大きくなっていますから、お姉さまのお姿がとっても大きく見えるのですよ」

「祐子は元気にしているのか？」

「はい、お元気でいらっしゃいます。由宇お姉さまは、今ではフルマの社長と部族長を兼務されていらっしゃるでしょう。いつも沢山の人たちと一緒に過ごされているのです。フルマは貧困者の救済基金を設立しました。理由が明確な方には、基金からお金を融資するのです。原則として貸与です。期限があって無いような長期の返済です。由宇お姉さまは、自分の生活は自分で改善する必要があると、部族の人たちに説いています。貧困に苦しむ人たちを救済はするけど、健常者であれば自分で立ち

上がろうとしなくてははいけないとおっしゃっています。でも、返済の目処の立たない人には、無償で供与してあげるのでよ。由宇お姉さまは、生存能力と生活レベルを段階別に区分して、大きな表を作り上げました。香川さんはこの表のことをバランス・マトリクスと呼んでいます。その表を使って、1次の審査をされているようです。そして、2次の審査で係官との面接を行います。大抵の場合は問題なく貸し出しや供与がされているようですが、時として、働かずに楽をしようとしている人も見えるようです。そういう人に対しては貸し出しをせずに、意識の指導を行っているようです。プチの人たちの間には、いま活気が出てきています。クツを怨む心も薄れてきていると鹿島さんもおっしゃっています。プチとクツとの間の交流も多くなってきていて、沢山の人がダンス教室や手芸教室に通っていて、それを通して二つの部族の人たちの心が通い合うようになってきているようです。鹿島さんもダンスを始められたんですよ。初めは嫌がっていらっしやったけど、今ではお楽しみになっておられるようですわ。わたくしも何度かご一緒させて頂きました。そうです。それから、レアメタルですが、フルマも鉱山を確保しました。香川さんがかなり積極的に動いていらっしやるようです。このあいだ東領製作所の本社資材部の方がお見えになったのですが、その時はわたくしは家におりました。由宇お姉さまもお隠れになっていらっしやって、長老の方が対応されていました」

「そうか、そういう話を聞くと、僕たちもがんばらなくてははいけないと思うな。亜紀は苦しい道を選んでいるけど、このまま進むつもりなのか？」

「はい、わたくしは可能な限りこの道を突き進みたいと思っています。まだ、あのような虫のいるベッドで休めるだけの、生命力がありませんが、そのうちあんな虫たちに負けない体になれると信じています。もう、蛇を見ても驚かなくなりましたし、ゴリラにも何度か出会いましたが、こちらを睨んだら睨み返してあげることができるようになったのですよ。たった1度だけでしたけど・・・普通は、ゴリラはわたくしたち人間と共存しているようです」

「亜紀、そうだよ。すべての存在と自分とはひとつだという意識ができてくると、自分に歯向かって来るものはなくなるよ。虫を嫌わないことだよ。恐怖心も無くさなくてはいけない。虫に話し掛けてごらん、きつと姿を見せなくなるよ」

「あなた、まだわたくしにはとてもそこまでできません。ああいう人の血を吸うような虫は嫌いです。消毒しても死なないんですから、なんと憎たらしい虫なんでしょう」

「分かった、分かった。ピザ、もう一枚食べろよ」
亜希子は素直に、最後の一切れを自分の取り皿に取って、ウーロン茶を一口飲んだ。

賢は亜希子をホテルの部屋まで送った。本当は引き止めたかった。亜希子が祐子と共に生きているのでなければ、力づくでも引きとどめるところだった。亜希子には祐子と自分しかないのだ。賢はホテルから、昨日と同じように円山動物園のエントランスの横の空き地に向けてテレポーテーションした。もう、人に気付かれるのは覚悟の上だった。

「おい、見たか？今、あそこに、急に人が現れたらろう？」
「なににない？どこ？ああ、あいつか？あいつがどうした？」
「さっき、あそこには誰も居なかった。そこに急に人が現れたんだ」
「おまえ、ちょうおかしい。そんなわけねえだろう」
「ほんとよ。そう、あの人よ、あの人がああ今あの空き地に出てきたんだよ。どこからかな？空から？ううん、地面から？ちがう、空気中から出て来たんだってば」

「マジで？うっそだろ。そんなことあるわけねえよ。お前ら目がおかしくなったんだよ」

「ああ、あったまおかしくなっちゃう。そんなことあるわけないわ」
2組の若者のカップルが騒ぎ立てている。賢は4人に近付いた。

「君たち、俺のマジックどうだった？観てたんだらう？」
「ええっ！あれ、マジックかよ。マジで、すげえ」

「おじさん、すげえじゃん」

女性が言った。

「ちょうすげえ。もう一回やってよ、アンコール！」

賢は言った。

「いいか、よく観ていろよ。種を見破ったら100万円やるよ」

そう言う賢は空中に浮き上がり、昨日の宮ノ森の通りに向けてテレポーテーションした。4人は言葉を失って、何時までもそこに立ち尽くしていた。今度は誰も見ていなかった。賢は昨日の調査の続きを行った。支社に戻ったのは終業30分前だった。札幌支店から亀田が来て賢を待っていた。

「内観部長、辞められるのですか？ どうしてですか？」

亀田は賢が、降格されていることを知らないかのように、賢を部長と呼んだ。

「何か始められるんでしょう？ もし、新しい事業を始めるのであれば、僕も呼んでください」

「もしそうなったら、声を掛けるよ」

「雪坂はいいな、部長と一緒に。俺もここに配転になりたかった・・・」
ため息を吐きながら亀田は帰って行った。

帰りの車の中で康子が言った。

「賢さん、最近忙しそうですね。私は手が空いていますから、お手伝いしましょうか？」

「いいよ、いいよ。それより、君も退職するんだから、いろいろ身の整理をしておかなくちゃならないだろう。あと実質1週間しかないぞ」

「私、もういつでも辞められるようになっています。ですから、お手伝いできますけど」

「そう、ありがとう。だけど、今は一人で行動した方が調査がやり易いんだ。ごめん」

康子は諦めた。梓は黙っていた。賢が亜希子の面倒を見ていることを知って、足を引っ張らないように見守ろうと思っていた。その日は梓が夕食を作る担当だった。梓と康子がまだリビングで寛いでいる間に賢は寝室に入った。ムクウからの通信が始まった。天耳という超能力についての話だった。賢はまだ天耳を使ったことがない。それは興味深い話だっ

た。

「賢、6神通力を知っているだろう。これから順次その原理と、その能力の実際の習得方法をお前に伝える。しかし、お前は既に認識しているから問題ないが、この神通力を最終目標にしているものは、危険極まりない。自分を破壊してしまう危険性を孕んでいる。それはどういうことかと言うと、本来自分が希求する方向に世界が動いてしまうということだからだ。お前はそれを求めたりしないので問題ないが、もしこれらの神通力を求めると、たとえば、今日話す天耳の能力を得ようと修行をすると、自分の鼓膜を振動させる波動をさまざまな形でキャッチしてしまうことになる。それはノイズであって天耳ではない。それに基づいて行動したりすると破滅を招くことがある。求めるのではなく、スイッチを切り替えるのだ。お前の得意とするところだ。聞こえるものを聞き取る。耳に聞こえる可聴振動はせいぜい10から20000ヘルツの間の振動だ。それを超えた振動は耳では聞こえない。普通の肉体修行を積んでゆくと、一番低い音1ヘルツから100000ヘルツくらいまでは聞き取れるようになるようだ。しかし、これはあくまで、肉体組織の器官の働きとしての聴覚で、音を聞き取る能力は耳にある鼓膜から耳小骨で増幅され、卵円窓に伝わり、そこから加速度センサーの耳石のある前庭を通過して蝸牛神経で神経信号に変換され、脳でそれを音として感じるような仕組みになっている。肉体的な修練を重ねれば、聴覚は鋭くなってくる。しかし、音はさっき言った可聴域の振動ばかりではない。可聴域を超えた振動がある。それを聞き取るのは、鼓膜の共振だけでは難しい。直接感覚として認識する必要がある。その機能は一つ一つの細胞に備わっている。外界とのインターフェイス機能を目覚めさせれば、それを感知できる。それでは、可聴域を超えた振動の波とは何なのかだが、それは超音波であり、電磁波であり、光だ。可視光は目で捉えられる。動物の中には可視光以外の電磁波を敏感に聞き分けられるものもあるが、もともと人間もこういう電磁波を感じられるようにできていたのだ。しかし、あまりの情報量の多さに人間が混乱を起し始めたので、誕生の過程でスイッチをOFFして、それを処理できる能力のあるものだけがスイッ

チをONできるようにしたのだ。一般の聴覚と平衡覚は内耳の機械センサーによって仲介される。このセンサーは耳石とか平衡石と呼ばれていることは知っているだろう。体が作り出す鉱物の複合結晶だ。繊毛が作り出す流れによって、その結晶化が変化するような構造になっている。つまりは音として感じるか、平衡感覚として感じるかをそこで振り分けているのだ。これが狂うと目眩めまいが生じてくる。ところが、この部分がとても重要で、ここをうまく制御できると、聴覚や平衡感覚をうまく制御できるようになる。そして、肉体としての人間の聴覚機能をフルに活用できるようになる。だがな、もしこれがすべてキャッチできたら、普通の人間は発狂してしまうぞ。賢なら大丈夫かもしれないがな。今まで話したのは、すべて人間の3次元的肉体の持っている機能だ。ほとんど知っていることだろう。だが、実は天耳とは耳に聞こえるあるいは細胞が聞き取れる音について言っているんじゃない。それは意識が聞き取る声だ。お前も既にテレパシーを使って、由美や祐子や亜希子と話をしているだろう。そのテレパシーを無作為の対象に向けて開いた状態が天耳だ。だから、賢にはそれほど難しいことではない。スイッチの切り替えをうまく制御できれば直ぐに実現できる。テレパシーについては説明する必要ないな。お前は既に実現できているのだから。そうだ、あのボールの機能を自分の内側に作り上げればいいだけだ。それは原智明が作ったオーラ・ビジョン・システムの原理を考えれば直ぐに分かるだろう。つまり、脳波の特定波長に同調させて、意識の窓を開くだろう。これを、脳波部分を切り離して、知覚部分を常にオープンの状態にすればいいだけだ。つまり、瞑想して全方位に意識を開くことだ。この前、康子が怯えていたとき、お前が家の周り全体に意識を張り巡らせたり、誰かに追跡されたときに知覚能力を全開にしたらどうだろう。あれを意識での傾聴機能にリンクさせればいいんだ。大体理解できたか？」

「はい、大体できると思います。傾聴するときにはどうしてもあるひとつの対象の声や音に意識をフォーカスしてしまいますから、今度一度全方向に向けて聴覚を完全にオープンにしてみます」

「だが、さっき言ったように注意が必要だぞ。あまりにも多くの意識の

声が聞こえてくるから、聞き流さないと、その波動の影響を受けるようになる危険性がある。それじゃあ、時間のあるときに注意して試して見なさい」

この日のムクウとの通信はそこで終わった。賢はいつもの通り省察をして暫く瞑想した。瞑想を解くと賢は眠りに落ちた。翌朝目を開くと、亜希子が賢の横に添い寝していた。亜希子は賢に必死に縋り付いた。

「どうした？亜希子、何があった？」

「あなた、しっかり抱きしめていてください。わたくし耐えられませんでした。今日10歳の女の子と7歳の男の子が飢えのために亡くなったのです。かれらには父親がいませんでした。母親は近くにあるコーヒー農園で働いているのですが、僅かな給金しか支払ってもらえず、1ヶ月の内1週間食べ繋ぐのがやっとなのです。あとは、水を飲んだり近所の人に食料をもらったりして、やっと生きていたのですが、女の子が風邪を引いたようなのです。抵抗力が無いから、簡単に病気になってしまうのです。男の子の方もその風邪が移ったのか、すごい下痢になって、ふたりの子供はわたくしが支援にこちらに来たときは大丈夫だったのですが、今日亡くなってしまったのです。子供たちを亡くした母親は、気が狂ったように泣き続けていましたが、最後には涙も出なくなってしまう、憔悴し切ってしまいました。一度に2人の子供を亡くしたのです。わたくしも必死に薬をあげたり、熱を冷まそうと頭を冷やしてあげたりしていたのですが、力が及びませんでした。たった1000円のお金があれば、この2人は助かっていたかも知れないのです。私は悲しくて、もう何もする気になれませんでした。直ぐにふたりの霊を追って幽界に入りました。でもふたりの意識にあったのは、病気の苦しみではなかったのです。おなかがすいたという意識しかありませんでした。私は必死になだめましたが駄目でした。それで、おいしいご馳走、エチオピアのクトフォーとドロワットを出してあげました。ふたりはまるで餓鬼のようにくらいつきました。哀れで観ていただけませんでした。わたくしは彼らに聞きました。ふたりはお金が無かったので小学校には行っていませんでしたが、不平は言いませんでした。ただ、目が回るほどおなかが

すいていたのです。男の子は栄養失調になっていて、下腹が丸く膨れていました。女の子はまるで骸骨のように痩せていました。それでも母親を助けて、コーヒー豆を運ぶ手伝いをしたりしていました。わたくしはアジスアベバでコーヒー豆の生産業者に会ったことがあります。彼らは外車を乗り回し、贅沢な生活をしていました。どこでこれほどまでの貧富の差が生まれるのでしょうか。搾取を取り締まる法律が機能していないのです。あの女の子はとても美人でした。でも痩せて、頬の肉が落ちていて……」

亜希子は賢に嚙り付いて泣いた。亜希子の施す救いの力が及ばなかったのだ。何がこれほどまでの貧富の差を生み出すのか？グローバル経済のあり方が間違っているのは明白だった。うまく立ち振る舞ったものは肥えて太り、まじめに一生懸命働いているものが貧困に喘いでいる。そんな構図を早く修正しなくてはならないと思った。また、現在の共産主義のような誤った方向に走らずに、人々の意識にリンクした経済システムを構築しなくてはならないと賢は思った。賢は亜希子を抱いたまま、ベッドから出なかった。亜希子は時々すすり上げて泣いた。暫くすると、部屋のドアをノックする音がした。賢は起き上がりドアの近くに行った。

「おはようございます。賢さん、まだ起きておられないですか？」

「起きていますよ。だけど、今日は少し、遅れてゆくから、梓と一緒に先に出掛けていてくれないか？」

「大丈夫ですか？ドアを開けてもよろしいですか？」

「いや、ちょっと待って……」

そのとき、亜希子のすすり上げる泣き声が響いた。

「賢さん、どなたかいらっしゃるのですか？」

「ごめん、後で入社するから、先に行ってくれ」

「……」

梓が廊下に出てきた。

「あら、康子さん、どうしたの？」

「賢さんの部屋にどなたか、女性の方がいらっしゃるみたいです」

「そんなことはないでしょう。で、賢さんは何て言っているの？」

「先に行ってくれって・・・」

「じゃあ、そうしましょう。賢さんも何か用事があるのでしょうか」

康子は不審に思っていた。しかし梓の強い言葉に附いて行かざるを得なかった。会社に着いてからも、康子はいらいらしていた。賢の寝室から聞こえた女性の泣き声が耳に附いて離れなかった。康子はどうとう「気分が優れないので病院に行く」という理由で、年休に切り替えて退社してしまった。そのとき、梓は席に居なかったので、梓にメールを入れて退社した。康子は急いで電車に乗ると賢の家に向かった。賢は亜希子が寢息を立て始めたときに直ぐに支社の階段の踊り場にテレポーテーションした。10時を過ぎていた。康子は既に退社した後だった。賢は12時15分まで資料のまとめをした。康子が賢の家に着いたのは11時50分を過ぎた頃だった。康子は家に入ると、直ぐに廊下に出てみた。誰も居ないようだった。康子は賢がまだ部屋に居ると思い込んでいた。賢の寝室のドアをノックした。しかし何の応答も無い。流石にドアを開けるだけの勇氣は無かった。勘違いかと思つてふと振り向くと、ちょうど洗面所の扉が開き亜希子が姿を現した。康子は心臓が飛び出すのではないかと思うほどびっくりした。しかし、思い切って口を開いた。

「あつ、あなた、どなた？」

亜希子は応えに窮した。

「・・・・・・・・」

「あなた、何時からここに居るのよ」

「・・・・・・・・」

亜希子は下を向いていた。

「賢さんは部屋に居るの？」

亜希子は黙つて首を横に振った。

「あなた、いつの間に賢さんをたぶらかしたのよ」

「・・・・・・・・」

「賢さんは本当に部屋に居ないのね？」

亜希子は頷いた。

「いいわ、あなた、そうやって何も話さないのなら、こっちにも考えが

あるわ、待っていなさい。今会社に電話してみるから」

そう言うと、康子はリビングのドアを開け電話の方に向かって行った。賢は昼食の時間になると、亜希子のことが心配で、直ぐにトイレに入り、人の居ないのを確認して寝室にテレポーテーションした。部屋に亜希子の姿は無かった。賢は亜希子がシャワーを浴びているのだと思った。そのとき、亜希子がドアを開けて入ってきた。賢は湯上りの亜希子の手を取って、引き寄せ抱きしめて口付けした。亜希子はたった今康子に会ったことを何も言わなかった。まだ、そのことを口にしたくなかった。亜希子はまだ悲しみから抜け切っていなかった。涙が頬を伝わって流れた。賢は亜希子を強く抱き締めた。

「亜紀、愛しているよ。一生君と一緒にだ。元気を出せよ」

そのとき、入り口のドアが開いて、康子が入って来た。咄嗟にふたりは離れた。

「えっ……これは、どういうこと？あなた、さっき賢さんは居ないって言ったじゃない。嘘ばっかし」

康子は賢の左手薬指にターコワイズの指輪を見た。そして、亜希子の左手の薬指にもお揃いのターコワイズがあるのに気付いた。康子の血が逆上した。

「賢さん、これはどういうことですか？私だけじゃなくて、ほかの女も連れ込んでいたんですね。ひどい。私には指輪なんて……」

賢も亜希子も何も言わなかった。康子は興奮して客間に行くと、デスクの上に置いてある化粧品などをスーツケースに放り込み、それを引き摺ってさっさとリビングに向かった。賢は言った。

「康子、どうするんだ？」

「わたし、帰ります。もうここに居たくありません」

「いいのか？……だけど、駅までは遠すぎる。タクシーを呼べよ」

康子は返事もせず、直ぐに電話を掛けた。賢は康子に話す言葉を捜した。

「康子、これには事情がある。ここで見たことは誰にも言わないでくれないか？」

「あ・き さんとのことですか？」

「そうだ。今は話せないけど、いろいろ事情があるんだ」

「その指輪も事情の内ですか？「愛しているよ。一生君と一緒にだ」っていう言葉も・・・事情の内ですか？」

賢は応えられなかった。亜希子は下を向いたままじっとしていた。

「ええ、ええ、誰にも話しませんよ。馬鹿らしくて、人になんて話せるもんですか」

タクシーが来ると康子をつんつんして家を出て行った。電話の横にこの家の合鍵が置いてあった。賢は寝室に戻った。亜希子がベッドの縁に腰掛けて涙を流していた。賢は再び亜希子を抱き締めた。亜希子もしっかり賢に抱き付いた。

「あなた、わたくしを思い切り抱いてください」

賢と亜希子は空中浮揚で飛行し、長沼町のレストランの近くで人気のない場所を見計らって降りた。レストランに入るとふたりは2人掛けのテーブルに着いてランチを頼んだ。この日のランチメニューはハンバーグ定食かオムレツ定食だった。亜希子はオムレツ定食が食べたいと言った。賢も同じものを頼んだ。

「あなた、あの方、康子さんっておっしゃるんですね。お友達ですか？」

「会社の同僚だ。自分のアパートがあるんだけど、暫く僕の家逗留していたんだ」

「はじめからそうおっしゃってくだされば、注意しておりましたのに」

「うん、ごめん、まさかこんなことになるとは思わなかったから。彼女、きっと朝気が付いてどうもおかしいと思ったんだな。それで会社を早引きして来たんだろう」

「あのひと、わたくしのことをアキさんって呼んだわ。大丈夫かしら？」

「まあ、君には迷惑は掛けないよ。それより、今あの家には梓も一緒に住んでいるんだ。梓に全部知らせて、君に窮屈な思いをさせないようにするよ」

「いいえ、いいんです。わたくし、ここにはもう、テレポーテーション

しないで、何とかいたします。そう、今度は一人でも大丈夫ですから、キガリのアパートにテレポーテーションします。そのほうが安心ですもの。お姉さまも近くにいらっしゃるし・・・」

「そうだな。そのほうが安心だな。まあ、おれは亜希子に会えてよかったけれど」

「わたくしもです。本当に幸せな3日間でした」

「もう逢えないみたいな言い方をするなよ」

「ごめんなさい、あなた・・・」

亜希子は賢の目をじっと見つめた。

ふたりは食事を済ますと、ホテルの部屋にテレポーテーションした。賢が部屋のベッドを見ると、虫が一匹もいなかった。

「亜紀、虫がないぞ。座ることぐらいならできるだろう」

「ええ、何か敷いて座ります。・・・あなた、元気でいらしてください。いろいろありがとうございました」

賢はもう一度亜希子を抱きしめて口づけし、宮ノ森にテレポーテーションした。幸い誰にも見られなかった。賢はまた昨日の続きの調査を行った。支社に戻ったのは4時過ぎだった。予定していた近隣の住民からの意見収集はほとんど終了した。支社に戻ると梓が賢を呼んだ。

「何でしょうか、田辺部長？」

「雪坂さんが入社して直ぐに早退したようですけど、何か知っていますか？」

「ええ、病気ではないと思います。私用でしょう」

「そうですか、それならいいですが・・・」

家に帰る途中、梓が賢に訊いた。

「康子さんどうしたのですか？」

「うん、どうやら家に亜希子が居るのに気付いていたらしくて、昼に家に来たんだ。僕も亜希子の面倒を見るために昼食時間に家に戻って来たんだけど、鉢合わせしてしまったんだよ。それで、怒って荷物をまとめて出て行ってしまったんだ。亜希子はもう家には来られないので、別の方法を探すと言っていた」

「そうですか。ということは、今晚からまたふたりになるのですね。あなたと2人きりで過ごせるのですね。でもあなたは海の老人とのセッションもありますから……」

「うん、そうだ。結構知らないことを教えて頂けるよ」

家に着くと、賢は直ぐにシャワーを浴びて寝室に籠った。亜希子と連絡を取りたかった。賢は亜希子の意識を追った。しかし、どうしても捕えることができなかった。昨日のムクウの指導に従って、意識を開放状態にし、自分の方向を向いているあらゆる意識を受け入れてみた。激しい嵐の街路に立っているような感覚を覚えた。凄惨な騒音が頭に鳴り響いた。その中に心地よい声が聞こえた。それは梓だった。梓が賢の事を思って、歌を口ずさんでいるのだった。もう一つの声があった。それは懐かしいような声だった。ゆきだった。ゆきが太郎と信次に賢の話をしているようだ。太郎と信次からも賢に向けた波動が伝わってくる。激しい波動も伝わってきた。それは康子からのものだった。賢に対して激しい憤りと執着が入り交じった感情が伝わってきた。愛子のふわっとした慕情に似た意識も感受できた。それ以外に誰か分からないが、沢山の人たちの意識が賢に向いているのが分かる。賢は棘のような鋭い意識もいくつか感じた。それに焦点を当てるのは苦しかったが、敢えて意識を向けてみた。一つは藤代肇の意識のようだった。否定的な暗い重い想念が感じられた。鉤の付いた縄のような想念も投げかけられていた。それは藤代が発しているのではなかった。しかし、その想念には怨念の様な陰湿な波動を感じた。それが誰かは分からなかった。賢があらゆる方向、あらゆる距離にある想念を見つめていると、ムクウの声が頭に響いた。

「賢、自分を開くときは、必ず心の清めを行ってからしなさい。鉤のような想念を発している者もいる。あるいは槍の刃先のような想念でお前を見ている者もいる。そのような者の想念をそのまま受け入れては、お前の心が傷を負う。先ず心を清め、意識を空の状態にして、一切のものがお前の心に引っ掛からないように準備してから窓を開放しなさい」
賢は直ぐに全方位の解放を閉じて、いつものようにムクウの方向に絞って意識を開いた。

「賢、今日は行為の放棄について話そう。おまえはギータを知っているだろう」

「はい、子供の頃にスワミに教わりました。何度も読み返すように言われました。でも、その内容を漠然としか把握できませんでした」

「内容を知っているのなら話し易い。おまえは既にその教えの中の大半を体得している。しかし、最後の目的としているところ、「行為の放棄」がまだ十分ではない。実はこれがお前が目指している、自分の核に至る一つの道であることを理解しなさい。これはクリシュナがアルジュナに教えた道だ。アルジュナは最終的にはこれを体得できなかったようだが、お前ならクリシュナと同じレベルの意識にまで到達できるはずだ」

「僕はそんなレベルの高い人間ではありません。この世界を生きるだけで精一杯です」

「それで十分なんだ。それ以上のことは期待されていない。ただ、その純粹さのレベルが問題なだけだ。ギータはこの世界に生きる者にとって、最も分かりやすい、人間の生きるべき道を示したテキストのひとつだ。だから賢もそういう意識でこれを見ることだ。その理由は第1にサンスクリット語で書かれているのにも拘わらず、その内容が分かりやすい言葉で表現されていること。読めば分かるだろう。第2にここに書かれている教えが、特別の修行の為の教えとしてではなく、日常生きているときに実行できるものだからだ。第3にあらゆる人々、あらゆる宗教を対象にしていることだ。第4にこの教えは神を信じる者であれば、たとえどんな宗教、団体に属していても関係ない教えであるということだ。第5に役に立たない迷信や神話の類を一切含んでいないこと。第6にこの教えは尊い叡智を含んでいて、全ての人に癒しを与えてくれる。第7に古代から現代に至るまで、どの時代にも役に立つ普遍的な教えであることだ。この7つの理由を聞いただけで、この教えが学ぶに値したものであることが分かるだろう。賢もマハーバーラタを覚えていると思うが、邪悪なカウラヴァー族に対して、正義のパーンダヴァー族が戦いを挑んだ話だ。クリシュナの弟子の騎士アルジュナはカウラヴァー族の中に自分の親族がいることと、尊敬する聖人達が居ることを思い、戦いの場に

において戦意を喪失してしまう。これをクリシュナが諭すのだが、その中でクリシュナはサーンキア・ヨーガの教えを説いている。その内容は掻い摘んで言うところのことだ。「感覚や思いに左右されて、意志がそれに付き従うと、風が水上の舟を掠^{さら}ってゆくように、感覚器官の働きが叡智を奪い取っていく。だから感覚器官に左右されない不動の意識が必要だ。そうすることで、不動の叡智が得られる。そして、あらゆる欲望や執着を捨て、憤怒、恐怖することのない者は、静寂の境地に到達し、真我に至ることができる。現在生きている自分の肉体は決して永遠に存在し続けるものではない。人は死んでも再び別の肉体を伴って生まれ変わる。それを繰り返す。しかし、真我だけは永遠に変わることなく存在している。行為もその結果も確固たるものではなく、従ってそこに生起する苦と楽には何等違いがない。それらに囚われてはならない」ということだ。お前もこれらのことは既に分かっていることが多いだろうが、もう一度それを確認して、不動の意識を持つことに努めなさい。意識したときだけ真我を認識するのではなく、常に真我に集中することを心掛けなさい」

「生と死にも執着するなどおっしゃるのですね。なかなか難しいです。親しい人、愛おしい人を亡くすと、自分の存在の半分が失われたような感覚に襲われます。それは真理を知らないからだけなののでしょうか？愛はどのように考えればいいのでしょうか？」

「それは、お前も知っているだろう。愛は永遠普遍のものだ。だから真我が永遠普遍であることを理解していると、この世界で死を迎えた人を見送るのも一時的なことだということが分かる。その時に起こる別れの悲しみは、旅行に出る人を見送るときのような一時的な離別の感覚に過ぎない。例えばひと昔前は、地方に住んでいた人たちは、子供が集団就職で上京するとき別れを惜しんで泣いたものだが、今では東京は目と鼻の先にあると云う感覚が出来上がったので、別れの感覚が薄れてきて悲しみの感情が湧かないのと同じようなものだ。鉄道インフラや通信の爆発的な広がりによって引き起こされた人々の意識の作用だ。死も同じだ。真我・・・お前が謂う、自分自身の本源こそが永遠普遍で、それ以外の

ものは全て写された像だと捉えると、悲しみの心は薄くなる。完全に真我に到達すると、この世界の生も死も同じだという感覚になり、人の死に際しては、移り変わりを眺めている心境になって悲しみの心は湧かなくなる。特に愛する人との離別では、その人に対する愛に永遠を感じるようになる。死に行く者も愛の中でこの世を去ることができると、永遠への帰還を意識して安心してこの世の生から離れられる。別離に際して悲しみも起こるかも知れないが、それは一時的なものとなるのだ」

「その通りだと思います。僕も麻子の死に直面したとき、麻子に対しては永遠の愛を意識していました。突き上げるような悲しみも、一時的な感情の起伏でした。」

「愛を通して永遠を知る、それが人間の生きる意味というものだ」
ムクウのギータの話はそこで終えた。賢は再び亜希子の意識を探してみた。しかし、どうしても亜希子を捉えることはできなかった。賢は亜希子の宿泊していたエチオピアの村のホテルにテレポーテーションしてみた。フロントの男性が言った。

「*****」(亜希子さんはこの日の朝、曾我野氏と一緒にチェックアウトしていて、行き先は分かりません)

賢は仕方なくテレポーテーションで自分の部屋に戻り、亜希子からの呼びかけに直ぐに応じられるように意識を全開にして眠りに着いた。しかし、とうとう亜希子からは何の呼び掛けもないまま、木曜日の朝を迎えてしまった。

賢は、その日は業務中も常に亜希子への意識を開いていた。康子は入社しても賢の方に視線を向けなかった。席が隣であることもあり、仕事に集中している姿は、意識的に賢に背を向けでもしない限り不自然に見えるところは何もなかった。昼食の時間になっても康子は賢を伺う様子を見せなかった。賢は黙って座っている康子に言った。

「昼食、外に出ようか？」

「私、今日は食欲ありませんので・・・」

賢が、梓を見ると、梓が席を離れて出て来た。

「雪坂さん、どこか具合が悪いの？」

「いいえ、ただ食欲が無くて・・・」

梓は賢と一緒に外に出た。途中で戻って来る安芸津とその取り巻きに会った。

「田辺部長、今日は部下を連れてお食事ですか？問題の部下を扱うのも大変ですね」

梓は安芸津の賢に対する誹謗には応えず、仕事の事で切り込んだ。

「安芸津部長、人員計画を頂きましたが、支店の事業計画書と照らし合わせてみようと思います。説明をして頂きたいと思いますので、午後一で伺ってもよろしいですか？」

安芸津は慌てた。

「事業計画ですか・・・それは・・・もう少し、待って頂けませんか？」

「それでは、2時に伺います。事業計画に基づいた人員計画で内容に不明な点があります。専務から疑問が投げかけられていますので」

安芸津が稲城に何か言いながら、小走りで支社のビルに向かって走って行った。梓は満足げに微笑んだ。

「あの人には、まともな話をするのが一番ね」

賢はそこに意識が無かった。梓は肩すかしを食ったような気がした。賢の頭の中に呼びかける声が聞こえてきた。それは祐子からだった。

「あなた、大変です。昨日からまた亜紀の所在が分からないの。亜紀は毎日私に電話をくれるのに全く連絡が無いんです。アジスアベバから南方の村落に貧困で苦しんでいる人たちを見舞うために出掛けていたのです。あの子は、毎日あなたとお話しているって言っていました。あなた何かご存じじゃないですか？」

「祐子、君も忙しいんだろう、ずっと連絡が取れなかったけど、亜紀とはコンタクトしていた。そっちの時間で昨日の朝までは元気だったことは確かだ。田舎町のホテルに泊まっていたんだけど、昨日の朝チェックアウトしてNGOの曾我野さんと一緒にどこかに移動したようだ。亜紀は「夜はキガリのアパートにテレポーテーションします」って言っていたよ。昨日の夜、アパートに戻らなかったかどうか調べてみるよ。君も

康介や香川さんに当たってみてくれないか？」

「分かったわ。直ぐに調べて、また連絡するわ」

賢は亜希子のアパートにテレポーションしてみることにした。一旦支社ビルに戻ると、そのままトイレに入り個室に入ってドアをロックした。亜希子のアパートの位置は容易に確定することができた。人気の無くなったタイミングをみて、一気にテレポーションした。アパートの部屋はきれいに片づいていて、誰も入った気配はなかった。亜希子が居た形跡もない。賢は祐子にテレパシーを送ってみた。

「祐子、今どこに居る？俺は亜希子のアパートにテレポしてみた。だが、ベッドも整えてあって寝た形跡はない。亜希子が戻って来たようには感じられない」

「あなた、康介さんに電話してみました。康介さんにも分からないようです。彼の会社はエチオピアに沢山のコーヒー豆の取引相手があるので、あの国にはちょくちょく出張しています。今彼が取引相手に問い合わせしてエチオピアの国内事情を調べて貰っています。私はこれから部族長会議です。それが済んだらまた連絡します」

賢は一旦支社のトイレに戻った。オフィスの自分の席に着くと、梓が呼んだ。賢の不可解な行動を心配していた。賢は言った。

「亜希子と連絡が途絶えたので、祐子とやりとりしているんだ」

「私も何か手伝えないかしら」

「ありがとう。もしかすると、急に消えるかも知れないけど、その時はよろしく頼むよ」

賢の言葉に梓は頷いた。康子が2人のひそひそ話に怪訝な眼差しを投げ掛けていた。その日の夕方祐子から連絡があった。まだ亜希子の消息は不明だった。祐子は康介と香川からも新しい情報は入手できず、そのほかフルマで取引のある会社にも問い合わせしていたが、その結果からも亜希子の消息に繋がる情報は得られていなかった。賢は万策尽きて為す術がなくなってしまった。一瞬藤代肇や登喜子に連絡すべきかどうか逡巡したが、祐子の存在が分かってしまうのを懸念して連絡することは止めた。その日、賢と梓は外食して帰宅した。帰宅すると賢は直ぐに入浴

を済ませ、寝室に引き隠り、瞑想状態に入った。意識を解放してあらゆる情報をキャッチしようと試みた。瞑想状態の中で賢は微かに亜希子の声を耳にしたと思った。

「あなた、・・・愛しています」

賢の意識に引っ掛かった声はそれだけだった。亜希子の声であることだけは確かだが、それ以上の事は分からなかった。祐子から通信があった。祐子も亜希子の声が聞こえたと言った。「由宇お姉様、・・・愛しています」という微かな声だけで、それ以外には何も聞こえなかったと言った。賢も自分に届いたメッセージを伝えた。ふたりは直感的に亜希子が危険な状態にあることを覚った。

その日のムクウからの通信に対して、賢は意識を傾注できなかった。しかし、ムクウは淡々と話した。

「賢、今おまえは亜希子のことで気も^{そぞ}漫ろだろう。だが、こういうときは自分自身を俯瞰して、感情の動きを見つめなくてはだめだ。おまえはこの世界を創造している神の存在を理解できるか？」

「はい、この世界が神によって映し出されていることは理解できます。でもムクウさん、僕は今亜希子のことで頭が一杯なんです。亜希子を救いたいです。申し訳ありませんが、亜希子を救うために全力を投入したいのです。ですからこのセッションを切らせてください」

「もし、そうしたら、おまえはもうわしからの連絡を受けられなくなるかもしれないぞ。それでもいいのか？」

「はい、僕は、このレベルの人間でかまいません。この世界が写像の世界であると分かっている、僕はその写されている亜希子を救いたいです。どうしてもそうしなくてははいられません。許してください」

「賢、勿論そうでなくてはいけない。しかし、自分の心の動きに動じてはいけない。意識的に生きる時、それが非常に重要になる。近いうちに亜希子の消息ははっきりするだろう。亜希子の運命も、祐子の運命も、そしておまえ自身の運命も変えることはできない。ただ、その現れ方を調整できるだけだ。最善を尽くして人を救ったり、人のために生きることは絶対必要なことだが、それもあくまで写されたものとして捉えてい

る意識をずらしてはいけない。神の話に戻るが、神はすべてを創造された。そして、それらすべてが演化してゆくのを眺めておられる。その中に、喜びに満ちているもの、苦しみに苛まれているもの、大切なものとして扱われているもの、貶まれ蔑ろにされているもの、すべてが含まれている。おまえのもっとも大切な人が、歓喜に溢れているときもあり、苦しみ喘いでいるときもある。その演化のただ中にあるときは、それを演じ切っていないてはならない。しかし、同時にその役柄を演じている自分を客観視していないてはならない。この世界にあるものはすべて神の意識の中にある。そして、それぞれの要素すべての中に神は存在している。それがこのマクロ宇宙と、ミクロ宇宙の仕組みなのだ。それは物質的な面と精神的な面の両方とも同じような構造になっている。おまえはもう、神とは自分自身の本質であることが分かっている。だから、神のようではなくてはいけない」

「僕にはそんな大それた考えは持てません。今はあくまで、愛する亜希子を救うことに全力を注ぎたいのです。一切の思考を止めて・・・」

そう言うと賢はムクウとの接続を切った。

賢はスマホの呼び出し音で瞑想を解いた。愛子からだった。

「賢パパ、亜希子さんの様な人がテレビに映ったよ・・・海外ニュース特番で、アフリカのエチオピアでクリミア・コンゴ出血熱が発生して、軍が急速その地域にある3つの村を封鎖してしまったようなの。その地域の内部を撮影したビデオがネットを通して流出したみたい。アナウンサーが日本人が巻き込まれているらしいって解説していて、そのビデオ映像が出たの。一人は男性でもう一人は女性だったけど、男性はNGOの人らしいと言っていたわ。女性は顔がはっきりと映っていなかったけど、服装が見えたの。それが亜希子さんが着ていた服に似ているの。ううっ・・・賢パパ、どうしよう。その女性は病気に感染している人たちと一緒に映っていたのよ。うううっ・・・床に敷かれた敷物の上に寝かされていたわ・・・大勢亡くなっているんだって・・・うううっ、えーん、えーん、えーん」

愛子の声が次第に震えてきてとうとう泣き声になってしまった。愛子の

気が動転し、悲嘆にくれている様子が手に取るように分かる。

「愛子、ニュースは今やっているのか？」

「えーん、えーん、えーん・・・どうしよう」

賢はスマホを握りしめて急いで部屋を飛び出すと、居間に行きテレビを点けた。どのチャンネルもニュースはやっていなかった。

「愛子、どこのチャンネルだ！」

「賢パパ・・・CBAだけど、もう終わっちゃったよ。同じニュースを11時からもう一度やるよ・・・賢パパ、どうしよう、えーん、えーん、えーん」

電話を切ると、賢はすぐに祐子にテレパシーを送った。

「祐子、亜紀の消息が分かりそうだ。日本のニュースで放送された。エチオピアでクリミア・コンゴ出血熱が発生したようで、感染地域が隔離されているようだ。その中に亜紀が居る可能性がある」

「あなた、私も今康介さんからその情報をもらいました。どうしましょう？亜紀を助けられるのは貴方しかいないわ。あなた、亜紀を助けてください。あなたの助けがないと、あの子は病気に感染して死んでしまいます。もう感染しているかもしれない。あなた、助けてください」

「亜紀は、緊急出動した軍に隔離幽閉されて身動きができないようだ。クリミア・コンゴ出血熱という恐ろしい伝染病の発生した区域に入ってしまったようだ。何とか助け出せないか考えてみる。祐子、あのビデオに写された場所を特定できないか、エチオピアの人に聞いてみてくれないか？」

「はい、フルマの関係者に今すぐ調べてもらいます」

「以前にもエボラ出血熱が発病したとき、軍が完全に包囲してその地域から一人も外に出さないようにしたことがある。だから、今回も同じような対応をしているのだから、通常的手段では近づくこともできないだろう。俺がテレポーションで潜入するよ」

「あなた、絶対感染したりしないでくださいね」

「俺は大丈夫だ。自分のすべての細胞に指令を出すから。俺の細胞はすべて俺の意識に従って活動しているからね。だから、先ず場所がどこか

を特定しなくてはならない」

賢は原に電話を掛けた。原は興奮を抑えて言った。

「語録研究会の会員に医師がいるから、その医師に相談してみます」

賢は数馬にも電話を掛けた。数馬も驚いた。

「自分にできることがあったら何でも言ってくれ」

緊張感が伝わってくる。数馬への電話を切ると、梓が小型のバッグを手にして居間に入って来た。

「あなた、亜希子さんのところに行くつもりでしょう。泰山で修行者の方から戴いた蘇生薬を持って行かれるといいわ。これはエチオピアの詳細地図よ。きっと必要になるわ。それから、2リットル入りの水のペットボトルと救急用具を一通り入れておいたわ。薬類は売薬だからあまり大したものではないけど」

そう言いながら梓はバッグを賢に差し出した。

「ありがとう。亜希子が危険な状態にあることがよく分かったな」

「私はあなたの妻よ。あなたのしようとしていることは分かるわよ」

賢は梓を抱き締めた。そのとき居間の電話のベルが鳴った。

「もしもし、内観ですが・・・」

藤代肇だった。

「内観君、どう責任を取ってくれるんだ。テレビに映ったのは亜希子じゃないのかね？」

「まだ、分かりません。11時のニュースで確認してみるつもりです」

「わたしはインターネットで部下に問題の映像を探させた。しかし、見つからなかった。亜希子がエチオピアに居ることを君は知っていたんだろう？君を許せない。もし、亜希子に万が一のことがあったら、君自身の身の処し方を考えることだ」

そう言うと藤代は電話を切った。電話口から藤代の憤りの波動が伝わってきた。賢はその波動を受け取らないように平常心を保った。賢は自分の寝室に戻って、スーツケースから蘇生薬を取り出し、持って来て梓の渡してくれたバッグに収めた。すぐに祐子からテレパシーの通信があった。

「あっ、亜紀が危篤なんです。意識が無いって……フルマの仲間から連絡がありました。あなた、どうしましょう？ここにはいい薬がないんです。康介さんがかけずり回って医者を手配し、薬を探してくれていますが、医者もあの地域には入れないようです。それに、医者はまだあまりもたないと言っているんです。あの亜紀がです。私のたった一人の妹が……うっうっうっ……」

祐子の悲しみが、激しい嗚咽となって伝わってきた。

「祐子、亜紀は今どこにいるんだ？」

「分からないわ。必死に探しているけど。亜希子の情報を流してくれた人も、伝え聞いた話だと言っていたそうなの。あなた、助けてください」賢は祐子とのテレパシーの通信が切れてから、亜希子の意識に一点集中して瞑想状態に入った。何も聞こえてこない。眉間に白い光が輝いている。その光が次第に強く輝いて、自分に向かって来る。

「あなた……、わたしよ、亜紀よ、あなた、あなた、どこにいるの？あなた、由宇お姉様はどこ？賢さん、あなた、あなた、あなた……」

賢を求め続けている亜希子の悲痛な叫びが聞こえた。意識がふらつき、定まっていないようだ。梓がそっと賢の肩に手を触れた。賢は瞑想を解いて目を開けた。テレビに海外ニュース特番の文字が映し出されていた。キャスターの音が響いてくる。

「あの、エボラ出血熱と同じように第1級の伝染病であるクリミア・コンゴ出血熱がアフリカのエチオピアで発生しました。発生した地域の3つの村はエチオピアの政府軍に包囲され、中に居る人々は外に出ることが禁じられ、完全隔離状態になっています。そんな中でネットを通じて一本のビデオ映像が公開されました。そのビデオには日本人とおぼしき男女が写っています。一人は男性です。男性は井戸堀りを支援していたNGOの曾我野さんと見られています。曾我野さんは感染していない模様で、ほかの感染していない現地の人たちと一緒に写っていますが、もう一人の日本人とおぼしき女性の方は、感染者達の寝かされている敷物の上に横たわっています。厚生労働省の海外伝染病対策本部が急遽ワク

チンをエチオピアに発送しました。しかし、そのワクチンが隔離地域に持ち込めるかどうか微妙なようです。これがネットに流れた映像の一部です」

賢は食い入るようにその映像を見つめた。横たわっているのは紛れもなく亜希子だった。賢の胸に悲しみの感情がわき起こり、目から涙が溢れるように流れ出てきた。賢は梓の渡してくれたバッグを手にとると意識をそのビデオ映像の中の亜希子に固定し、その位置に移動することを意図した。やがて真っ暗な空間に投げ出され、賢は自分が彷徨っているのを感じた。どこに向かっているのかも分からない。ただ浮遊する意識に身を任せるしかなかった。遠方に先ほど見た白い光が見えた。光が呼んでいる。

「あなた、ここよ、あなた、ここ、はやくいらして、あなた……」
賢がその光に向かって意識を完全に研ぎ澄ますと。急に光の中に吸い込まれた、と思った瞬間、薄暗い土の上にいる自分が分かった。そこは建物の中のように大分気温が高い。夕暮れの屋内に、灯りが点っているのが分かる。辺りを見回してみた。全く飾り気のない、蒸れたような異臭のこもった場所だった。うめき声が聞こえてくる。

「ウー、ウー、ウーン」

声は一つではない。その中に明らかに女性の声と思われるものもある。賢は視線を前方の下方に向けた。次第に薄暗さに目が慣れてきて、大勢の人たちが横たわっているのが分かってきた。30人以上の人たちが横たわっている。何人かのマスクをした女性が横たわっている人たちの近くに膝を突いて世話をしている。賢は亜希子の姿を探した。しかし姿が無い。あのビデオの映像とは雰囲気が違っていた。賢は人々の横たわっているその奥にもう一つ部屋があるのに気付いた。奥に進むと気温はそれほど高くないのに変な熱気を感じた。次の部屋に足を進めようとする、看護していた一人の女性が立ち上がって賢の袖をつかみ、前に行くのを制止するように引っ張った。賢は英語で言った。

「I'm Japanese. I'm looking for one Japanese lady.」(僕は日本人だ。一人の日本人の女性を捜している)

女性は顔くと袖を引っ張っていた手を緩めた。賢はそのまま次の部屋に向かって進んだ。部屋の中に一歩足を進めると、汚物と腐敗臭の混ざったような異臭に吐き気を催した。敷物の上に5人が微動もせずに横たわっている。賢は目眩を感じた。中には便を垂れ流しているように見える男性も居た。一番端に白いワンピースを着た一人の若い女性が居た。賢は亜希子に駆け寄った。

「亜希子、俺だ、賢だ。亜紀、元気を出せよ」

亜希子は全く動かない。体が火のように暑い。かすかに呼吸をしているのが分かるだけだ。亜希子は意識がなくなっているようだった。賢は持ってきたバッグからタオルと水を取り出した。タオルに水を含ませて、薄暗がりの中でも、真っ赤になっているのがはっきり分かる亜希子の顔を拭いた。タオルはすぐに熱くなってしまったが、賢は水を無駄に使いたくなかった。バッグから紙コップを取り出して半分ほど水を満たし、亜希子の紫色の斑点が現れている唇の上に少し注いだ。そして、今度はキッと口を結んでいるあごを無理矢理押し下げて口に隙間を作り、水を注ぎ込んだ。しかし、水は口の奥にまで入っていかなかった。亜希子の意識は戻らない。賢の頬を涙が伝わって流れた。賢はタオルを絞ると、今度は亜希子のワンピースの胸を開け、体を拭いた。すごい熱である。賢はこの熱が全身の体液から出ていることを見て取った。自分の両手を摺り合わせ、奇経脈に沿って亜希子の全身を擦った。亜希子の呼吸はほとんど止まっている。賢はバッグから蘇生丸薬を一粒取り出し、それを自分の口の中に放り込み、紙コップに一杯水を注ぐとそれを口に含んで、丸薬が溶けるように口の中でくゆらせてから、亜希子に口移しで水を流し込んだ。その光景を立って見ていた看護をしていた女性が一步後ずさりした。賢は右手で亜希子の首を抱えて引き上げ、口の中の水を亜希子の口の中にゆっくり注ぎ込んだ。ほんの少しだが水が食道の方に流れ込んだように思えた。口の中の丸薬はだいぶ溶けてきた。賢は亜希子の背中を擦り軽くたたいた。亜希子が力なく、むせたように口から水をはき出した。賢は口移しで、再び水を亜希子に与えた。今度は少し食道に流れ込んだようだった。亜希子が水を飲み込んだのが分かった。賢はそれ

を続けた。丸薬が溶けるまで続けた。少しずつ、少しずつ、亜希子の口に移していった。20分ほど掛けてコップ一杯の水を亜希子に与え切ることができた。賢は亜希子の横に添い寝して、自分の体を亜希子の体に密着させた。そして上半身を擦った。

「亜紀、俺が来たからもう大丈夫だよ。つらかったろう。けどもう大丈夫だよ」

その言葉が聞こえたかのように、亜希子は目を開けた。

「あ・・・な・・・た・・・」

「亜紀、気が付いたか？亜紀、水を飲みなさい」

そう言うと賢は再び自分の口にコップ半分ほどの水を含み、それを口移しで少しずつ亜希子に与えていった。

「あ、あ・・・あなた・・・あなた・・・みんなを・・・たすけて・・・あげて・・・ください」

「わかった。けど、まず亜希子、お前が元気を取り戻さなくちゃ駄目だ」

賢は亜希子の首に廻していた手を外し、亜希子を横たえてから、上丹田、中丹田、下丹田に順に右手を置き、左手を背中に回して身体を挟むようにしてプラナを注入した。凄い勢いで、プラナが亜希子の体内に注ぎ込まれてゆく。賢は亜希子の身体を構成している全ての細胞と、進入してきた全てのウイルスに意識で語り掛けた。

「亜希子を構成している全ての細胞達よ、君たちはまだ死滅することは許されていない。亜希子の意志に従って蘇るのだ。そして、クリミア・コンゴ出血熱を発病させているクリミア・コンゴウイルス達よ、君たちの生息できる場は、人間の身体の中ではない。今直ぐ大自然の摂理に服しなさい」

賢は再び添い寝して、亜希子を強く抱きしめた。亜希子の肉体が浄化され、ウイルスが退散してゆく状態をイメージし実体化させた。亜希子は目を開いた。荒れた波が引いてゆくように炎熱が収まっていった。

「あなた、あなた、愛しています。あなた・・・みんなを助けてあげてください。お願いいたします」

亜希子は起きあがろうとして腹部に激痛を覚え、再び横になってしまった。

「亜紀、焦ってはいけない。ウイルスはほとんど退散した。だが、まだ内臓や筋肉を構成している細胞が蘇生している最中だ。特に循環器系が仮死状態に近かった。あと1時間は掛かるだろう。その間、瞑想して南素の法でプラナを吸収していなさい。もう暫く横になっていなくてはいけない。俺は亜紀が回復している間に、周りの人たちを直すから」

亜希子の横にいる4人の内、2人は既に死んでいた。生きている2人の内、一人は70歳前後の老婆、もう一人は30歳前後の青年だった。先ほどから賢の様子を窺っていた看護の女性が、何時の間にか賢の直ぐ横に来て跪いて賢の様子を凝視している。賢は先ほど亜希子に施したのと全く同じ事を2人にも施した。青年は直ぐに回復の様子を示してきた。そして痩せた顔に窪んだよう覗いている目を見開くと、賢の右手を握り締め涙を流した。賢は頷いて見せたが、青年の額に左手を添えて、その場に寝ているようにジェスチャーで示した。老婆は直ぐには目覚めなかった。汚物を垂れ流していた。賢は老婆の衣類を緩め、タオルに持参した水を少量浸み込ませて老婆の身体を何度も拭いた。熱は一向に引かない。賢は立ち上がりその建物の中のシンクを探した。跪いている看護婦に聞いた。

「Where is water ? Are there any sink or cell? I need water. Water, water.」(水は何処だ?シンクか井戸はあるか?水が必要だ。水、水)看護婦は直ぐに理解した。賢は看護婦の後に附いて外に出た。井戸はまだ出来ていなかった。ドラム缶に貯水されている水が、この人たちの命を支えていることを知った。賢は看護婦の渡してよこした桶に水を汲み、それを持って老婆のところに行くと、先ず汚物の始末をしタオルで老婆の下腹部を奇麗に拭った。何度も何度もタオルを濯いで、汚れが消えるまで拭った。汚物は看護婦の持って来た紙に包んで端に避けた。賢は再び水を汲んで来て自分の手を洗い、瞑想し、意識で自分の手を浄化した。賢は瞑想の中で老婆の意識に話し掛けた。日本語で大丈夫だった。「あなたは、いま、助かりました。また家族と平和に暮らせます。回復

したことを歎き、静かに、ゆっくり呼吸を続けてください」

賢は瞑想状態のまま、婦人の下丹田に最大級のエネルギーの注入を行った。そして老婆の全ての機能を構成している細胞達に回復する努力をするように話し掛けた。やがて老婆は皺だらけの顔から赤みが引いていった。もう辺りは大分暗くなっていたが、顔のどす黒かった色が次第に焦げ茶色に戻っていくのが分かった。老婆は目を開いて言った。

「アマサグナッロー・・・ダスブロンニャル」（ありがとう・・・うれしい）

横にいた看護婦が涙を流している。老婆の目から一筋の涙が流れて頬を伝って落ちた。賢は亜希子のところに行った。

「亜紀、少し起きあがってみて」

賢は亜希子の背中に手を回して、静かに身体を支えて起きあがらせた。

「あなた、痛みが消えました。あなた、来てくださったのですね。わたくし、このまま死んでゆくと思っていました。あなたを愛しながら、由宇お姉様を慕いながら・・・でも、やっぱり、あなたは飛んできてくださって、わたくしを救ってくださいました。何度も、何度も救ってくださいました。あなた、わたくしを抱きしめてください」

賢は亜希子を抱き締めた。亜希子は顔を賢の顔に押し着けて、静かに目を瞑った。賢は自分の腕の中にいる亜希子にエネルギーの注入を続けた。亜希子が賢から放れたときには、すっかり元気を取り戻していた。賢は亜希子の手を取って立ち上がらせてみた。しかし、足元がおぼつかない。筋力が弱っているようだった。賢は亜希子を小脇に抱えるようにして隣の部屋に入った。先ほどの看護婦が2人の後に附いて来た。賢は振り向いて看護婦に言った。

「Are they all of patients?」（彼らが患者全員ですか？）

「Yes, they are.」（はい、そうです）

「Are there any other people who are suffering from Crimean - Congo Hemorrhagic Fever?」（他にクリミア・コンゴ出血熱に罹っている人は居ませんか？）

「No. We are allowed only this area for the patients.」（いいえ。ここだ

けが患者用に与えられた場所です)

「Ok, we shall try to treat them. Could you bring many water bowls for drinking and wiping their bodies as long as you could.」(分かりました。それではみんなで治療しましょう。飲んだり、身体を拭いたりするために、できるだけ沢山の水桶を用意してください)

「Yes, sir.」(はい、わかりました)

そう答えると看護婦は、仲間を連れて外に出て行った。

残る患者は32名だった。賢は先ず瞑想に入った。別の次元を用意し、そこに全ての人たちの肉体を転写した。そして、自分自身もその別次元に移り、全ての罹患者の細胞の上にエネルギーのシャワーを浴びせた。それは巨大なプラナだった。賢は罹患者の体内に入っている全てのウイルスに本来的な位置に戻るように諭した。ウイルス達は光芒に幻惑し、逃げまどっていた。賢は諭し終わると再び光を浴びせかけた。病原菌の細胞は人間の肉体内で存在することが困難になり、経穴を見つけると、罹患者の体内から逃げるように抜け出していった。次第に全ての人々の身体から熱が引いていった。賢はその奇麗になった肉体を現象界の次元で病苦に苦しんでいる肉体に重畳させた。病原菌は現象界の肉体からも消えていった。賢は全ての患者の肉体を構成している細胞に蘇生のプロセスに入ったことを宣言した。32人の肉体が生命力を回復していった。亜希子が言った。

「あなた、みんな助かるのですか？」

「うん、多分大丈夫だろう。病原菌がほとんど見えなくなったからね。ここに居る32人の患者さんは、後は自力で回復するのを待つだけだと思うよ。亜紀、具合はどうだ？」

「大分、楽になってきました。あなた、あの亡くなった方の魂を導いてあげたいのですが……」

「亜紀、君はまだそんなエネルギーを使ってはいけない。僕が覗いてみるよ。もし彷徨っている人がいたら道を教えてくるよ」

そう言うと賢は瞑想状態に入り、幽界に意識を移した。多くの人たちが彷徨っている。ほとんどが自分が死んだことを理解していない魂だった。

賢は彷徨っている人たちの上に、再びエネルギーのシャワーを注いだ。彷徨っていた人たちは驚愕した。賢が光り輝いて見えた。賢は日本語で話し掛けた。言語は関係ないはずである。

「あなた方は、燃えるような熱の中で意識を失い、そのまま亡くなってしまいました。あなた方の命は永遠ですから、これから生まれる前に居たところに戻る必要があります。僕の話が理解できますか？」

誰も頷かない。驚きと畏れが顔に表れている。

「畏れないでください。私はあなた方にこれから進むべき道を示すためにやって来ました。あなた方は病原菌に感染して、高熱に苦しみ、身体の機能が麻痺してしまい、終に亡くなってしまったのです。亡くなくても自分が消滅していないことが分かるでしょう。あなた方は永遠の生命を生きているのです。ただ、生きる場所が変わるだけです。これから、死んだ後の世界に移行しなくてはなりません。今まで生きてきたところより、ずっと楽に生きてゆけますよ。さあ、今度は私の話が分かりましたか？」

殆どの人たちの顔に微笑みが伺えた。まだ分からない者も居たが、彼らも周りに居る者たちの様子を見て、次々に自分も死んだらしいということを受け入れていった。どうやら全員が自分の死を理解したと思ったとき、賢は意識で霊界に呼び掛けた。直ぐに大勢の導く者達が姿を顕わし、彼らを優しく導いていった。賢は現象界に意識を戻し、亜希子に言った。

「みんな帰って行ったよ。随分大勢の人が亡くなっていたんだね。さっき君の近くに居た、亡くなったばかりの2人の姿もあったよ」

先ほどの看護婦が目には涙を一杯溜め、胸の前で両手を組んで賢に向かって跪いていた。そのほかの看護婦は病人が急に回復してきたので、何が起きたのか訳が分からないようだった。賢は亜希子を連れて曾我野の処に行くことにした。亜希子が場所を知っていたが、そこからは1キロほど離れた場所だと言った。賢は亜希子を自分に齧り付かせると、空中浮揚で一旦亜希子の宿泊場所に移動した。賢は亜希子に言って壁際に置いてあったスーツケースを開け、用意していた薬品類をすべて賢のバッグに移させ、パスポートと財布だけを取り出して亜希子に持たせた。それ

から衣類を下着まで全て着替えさせた。脱いだ衣類はランドリー用の袋に入れてスーツケースに収め、スーツケースをロックして壁際に戻した。賢は亜希子の後から部屋を出ると、亜希子が受付に金を支払いチェックアウトを済ませた。とてもホテルとは言えない、普通の家のような宿だったが、宿の主の対応は毅然としていた。隔離されている状況下で夜にチェックアウトする亜希子を不審そうに見ていた。賢が怪訝な目つきで2人を見ている宿の主に、クリミア・コンゴ出血熱の患者は全員回復したので政府の保健機関に対して隔離の解除を要請して欲しいと頼んだ。賢は自分のバッグを手にし、正面から抱きついて来た亜希子を従えて、曾我野達の居る場所に向けて空中浮揚した。木々の上を滑空してゆくと灯りが見え、そこに大勢の人たちが寄り合っているのが分かった。亜希子が言った。

「あなた、あそこに曾我野さんがいらっしゃいますわ」

暗闇の中、電灯の光で浮き上がった大集団の中で、曾我野は数人の村の人たちと何か話をしていて、2人は灯りから少し離れた場所に着地した。賢は亜希子を伴って人々の居る場所に近付いて行った。曾我野が亜希子に気付いて叫んだ。

「アキさん・・・アキさんじゃないですか？大丈夫なのですか？」

「はい、わたくし直りました」

村人達は、一斉に亜希子に視線を向けた。

「えっ！・・・本当ですか？信じられませんよ！だって、あなたは危篤だったでしょう。本当なら、奇跡ですよ、奇跡！だけど、あなたはまだ完治していないんでしょう？・・・それ以上、こっちに来ないでください。ここにいる人達に感染してしまいます」

そう言いながら、曾我野は周りの者達を促して一緒に後ずさりした。亜希子が言った。

「わたくしと一緒に寝ていた、危篤のおふたりが亡くなりましたが、私を含めて残りの35人の感染者は助かりました。後は体力の回復を待つだけです。曾我野さんもマスクをして、彼らを支援してあげてください。もう感染することはないと思います」

曾我野は離れたところから叫んでいる。

「一体何があったのですか？どうしたというのですか？どうやって助かったのですか？あなたも、みんなも」

「はい、この方が救ってくださいました。大変お世話になりました。わたくしはこれからキガリに戻ります。残りの医薬品などは、このバッグに入っています。そのままお使いになってください。また、出直して参ります。あなた様もご健康にお気を付けになってお過ごしください。政府に連絡を入れて頂くよう、宿のおじさんに頼っておきましたの。暫くしたら、軍の隔離が解除されると思いますわ。よろしくお願ひします」賢がバッグをそこに置くと、曾我野が慌てて言った。

「ちょ、ちょっと、待ってください。もうクリミア・コンゴ出血熱は収束したというのですか？その方はどなたですか？・・・僕には信じ・・・」

亜希子と賢は頭を下げるとその場を後にし、少し離れた木陰からキガリの亜希子の部屋に向けてテレポーションした。

2人は部屋に出現すると少し休息を取ることにした。賢はスーツケースを置くと、直ぐに亜希子にシャワーを浴びるように言った。亜希子は先ず手を洗い、手足の消毒をしょうがいをしてから着替えを用意し、そのままシャワールームに向かった。賢はコーヒーを用意した。そして、祐子にテレパシーで呼び掛けた。祐子は直ぐに応答してきた。

「あなた、どうなりましたか？亜紀には会えましたか？亜紀は大丈夫でしたか？亜紀は助かったのですか？」

「うん、助かったよ。罹患していた人の内、2人は死んでしまっていたけど、あとの34人は全員助かったよ。大勢亡くなったようだ。彷徨っている人たちも帰霊するように導いてきた。後は政府の収束宣言と隔離の解除を待つだけだ。今、亜紀はキガリのアパートに戻って来ている。大丈夫だとは思うけど、亜紀が消毒を済ませてから君に連絡するまで、ここには来ない方がいい。一応病人の身体の中からウイルスは消えていると思うが、何処かに潜伏している可能性も否定できない。身体が回復して、一定期間経過するまで当面は電話で話をするようにした方がいい」

「あなた、わかりました。ありがとうございます。あなた、わたしは嬉しくて、涙が流れて止まりません」

「それから、亜紀を救うために働いてくださった方々に、連絡してくれよな」

「勿論よ・・・あなた、ありがとうございます、ありがとうございます、ありがとうございます・・・」
亜希子がシャワーを浴びてさっぱりとした様子で現れると、賢は用意したコーヒーを亜希子に差し出した。

「亜紀、先ずエチオピアにあったものを消毒した方がいい。それから、祐子に連絡を入れなさい。僕もこれから身体を洗うよ。亜紀の衣類と僕の衣類も全て洗濯してしまおう。衣類を乾かしてから日本に戻るから」
亜希子はやつれた顔に微笑みを浮かべて頷いた。賢は亜希子と自分のクツを持ち、直ぐにシャワールームに行き、裸になり、先ず、亜希子と自分の全ての衣類を洗濯しクツを洗った。それらをハンガーに掛けてから丁寧に口を濯ぎ、それからシャワーを浴びた。シャワーを浴びると、賢はタオルを腰に巻いて部屋に戻って来た。亜希子がパスポートや財布などに消毒液を掛けていた。亜希子は消毒の手を休めて、チェストからバスローブを出して賢に渡した。賢は亜希子のバスローブを着ると、バスルームと洗面台を消毒するために、亜希子から消毒用のスプレーを受け取った。賢は消毒を終えると梓に電話を掛けた。

「梓、亜希子は助かったよ。君のおかげで殆ど上手くいった。特に水と蘇生丸薬が役に立った。亜希子が元気になるまで、僕は亜希子に付き添っているよ」

「あなた、わかりました。おめでとうございます。身体に気を付けてくださいね。亜希子さんにおめでとうございまして伝えてください」

賢は電話を切ると、亜希子に言った。

「亜紀、梓がおめでとうって言っていた。みんなとても心配していたんだよ。そうだ祐子が待っている。直ぐに電話した方がいいよ」

亜希子は祐子に電話を掛けた。電話が通じると、亜希子は受話器を持ったまま泣き出してしまった。賢には祐子も泣いているのが分かった。賢は2人が電話を通して言葉もなく涙している様子を暫くの間じっと見つ

めていた。漸く涙が止まると、亜希子が言った。

「由宇お姉様、わたくしはこのまま死んでゆくと感じていました。死んでも命は無くならないので、それほど怖れはありませんでした・・・気が付いたとき、あの方がいらっしゃいました。あの方は永遠の命があると分かっているわたくしを、どうしてご自分の危険も顧みずに助けてくれたのでしょうか？」

「あのひとは亜紀を愛しているのよ。今生きている場が、自分自身にとって全てなのよ。だから、たとえこの世界があの人のように写された世界であっても、どんなことがあっても、あのひとは自分を顧みずに亜紀のことを助けるわ。私たち3人は一つなのよ。亜紀、もう一人で危ないところに行かないって約束して」

「ごめんなさい。もう、二度と危険なところには参りません」
祐子はどうしても直ぐに来たいと言った。亜希子は身体が順調に回復しているようなので、明日までもう一度消毒をしておくと言った。賢は亜希子にベッドに横になるように言うと、冷蔵庫を開けてみた。中には3枚の冷凍ピザがあった。賢は直ぐにピザを温め、インスタントスープを用意して、ベッドサイドに持って行き、亜希子に食べさせた。亜希子の身体は、ピザは受け付けなかったが、スープは匙で掬って、少しずつ喉に流し込むことができた。亜希子に食事を与えると、賢はベッドに潜り込んで亜希子に添い寝した。亜希子の身体を静かに抱きしめた。亜希子の身体は力が無く、衰弱の様子がはっきりと伺えた。賢は自分の身体から亜希子の身体に気のエネルギーを注入するように意識した。亜希子は賢の腕の中で直ぐに眠りに落ちた。

翌朝7時に目覚めたとき、亜希子は自分が賢の腕の中に居ることが信じられなかった。賢はただの人間ではないと思った。亜希子は元気を取り戻していた。朝食の支度をすると言ったが、賢は自分がやるからまだ休んでいるように言った。亜希子は身支度を調べてソファで休んだ。賢が冷蔵庫からピザを取り出し暖めた。スープは亜希子の言う通りに作った。材料は全てキッチンの戸棚に収められていた。賢は自分用に昨日のピザ、亜希子には新しいピザを用意した。コーヒーを入れてそれをテー

ブルに並べ終えたとき、誰かがドアをノックした。賢がドアを開けると、祐子と康介が立っていた。亜希子も急いでドアの処にやって来た。

「あなた、どうしてここに？・・・テレポーテーションね。亜紀！よかった」

康介は賢の姿に驚いて直ぐには言葉が出なかった。

祐子と亜希子はその場で抱き合った。康介が言った。

「パン持ってきたす。一緒に食べようと思って」

「さあ、中に入って」

賢がコーヒーを入れ、康介が持ってきたパンを食卓に用意した。4人は食卓を囲み、亜希子の奇跡的な回復を祝してコーヒーで乾杯した。

由仁

賢が自分の家に戻ったのは、土曜日の夕方だった。その日、梓は家に待機していた。賢がリビングに姿を顕すと、梓が駆け寄って来た。

「あなた、ご苦労様でした。おめでとうございます」

「梓、きみのおかげで亜希子を救うことができたよ。本当にありがとう」

「いいえ、あなたのお力です。先ほど海外ニュース特番で取り上げられていました。各国が神経をとがらせて注視していましたから、直ぐに特ダネニュースとして報道されました。病人が奇跡的に回復したと伝えていました。現地の看護婦の証言で、一人の神のような人物が全員を救ったと。でも、どうして、彼が瞑想すると患者が急に回復してきて、その後の検査でも身体からウイルスが検出されなくなってしまったのか、学者達は疑問に思っているようです。まだ疑いを持っているエチオピアの衛生局は隔離状態を解除していませんが、現在国連の支援部隊も参加して、国の衛生局の人たちと協力して、住民を一時別の場所に移し、その地域全体を消毒する処置をしているようです。病人の居た建物は患者の衣類や治療器具と共に焼却処分されたようです。今、政府の機関が罹患者を救った人物を捜しているようです。奇跡的に危篤状態から蘇生した

亜希子さんが行方不明になっていることも、話題になっているようです。全てあなたがなされたのですね」

「うん。元々あんな病原菌など存在しないはずなんだ。だから時空を切り替えて元通りになるように導いただけだよ」

「あなたは、普通の人間のレベルを遙かに超えているでしょう。わたくしは、これからもあなたの女房役で居られるのかしら？わたくしにできることと謂ったら、せいぜいお食事の支度くらいのもんですから、自信がなくなりました。あなたと共に生きているこの世界が実際にある世界なのか、本当は夢の中なのか分からなくなってきました。ミクロの世界もマクロの世界も、何も違わないっておっしゃったでしょう？そして、あなたはそれを次々に実証して見せる。あなたの意識にはウイルスも仲間のように映るのですもの。私には理解できないんです。」

「人間より、ウイルスの方が扱いやすいからね。人間は道理を通した上で「右」と言っても右、左、上、下、どこを向くか分からないし、指示を無視することもあるけど、ウイルスの様な単純な微生物は自然の摂理に適えば、全て同じ方向を向くからね」

「あなたのお話が真実である事は、あなたが行うことで分かります。でも、わたくしには絶対できないことです。そう、あなた、原さんから何度か電話がありました。ここに物質転送機の工場を建てたいそうです。電話を欲しいとおっしゃっていました」

梓はそう言うと、直ぐに台所に入った。賢は原に電話を掛けた。原は亜希子の回復を聞いて喜んだ。愛子も電話口に出た。2人とも涙声だった。愛子は梓が言ったのと同じニュースの話をした。その話が直ぐに学校で話題になって、来週の道德の時間にテーマとして取り上げられることになったと言った。亜希子の話の後、原は賢の住んでいる土地の近くに物質転送機の工場を建てたいと言った。初めは小規模の工場からスタートして、次第に大規模工場にまで発展させることができるような工場がいいと言った。どうやら、この牧場跡地を意識しているようだった。

「原さん、北海道に工場を建てても、資材調達や製品発送であまりメリットがないと思いませんか？まさか、物質転送機で送るつもりじゃ？」

「賢さん、僕はそのつもりですよ。大型の物質転送機を1台設置したらいいんじゃないかと思っています」

「いや、もしかしたら原さんはこの星の人じゃないんじゃないですか？この社会の中に、いきなり未知のシステムを導入したら、大変な騒ぎになりますよ」

「いいアイデアがあるんです。物質転送機の製造現場をブラックボックス化するんです。そして、二つのブラックボックスの製造拠点を設けて、その一つから、もう一つに商品を転送するんです。製造関係の従業員にも、このブラックボックスのルールを適用して、彼らから商品の流れが見えないようにするのです。ちょっと面白いですよ。法律の許す範囲内で行いますから大丈夫ですよ。それに附いてもう少し具体的に相談したいので、明日の朝の便でそちらに伺いたいんですが・・・」

「それは楽しみだな。待ってます。僕も、事業の具体化の為の行動ができなくて、少し焦燥感を覚えていたところなんです。明日は迎えに行きますよ」

「愛子さんも一緒に行くと言っています。少し代わります」

「僕も、今それをお願いしようと思っていたところです」

「もしもし、賢パパ、学校、月曜日が振り替えで休日なのよ。1泊してもいいでしょう？」

その日賢はベッドに入る前に、もう一度シャワーで身を清めた。浴室から戻って賢が瞑想を行っていると、ムクウから通信が来た。

「賢、細胞や、微生物と対話できるようになったようだな。だが一つ注意しておくことがある。微生物が出している意識は、個々の意識ではなくて集団としての意識で、人間に対して善として働く面と悪として働く面の両面を持っているということだ。今回のお前の対応は正しかったが、場合によっては、ある特定の微生物の特定の作用を抑制や助長させようとしてコミュニケーションすると、結果としてその対処方法を誤ってしまう危険性がある。そのことを認識しておきなさい。例えば大腸菌の場合なんかでは、増殖することによってベロ毒素という強力な毒素を生産して人間に悪い影響を与える微生物となる場合もある。大腸菌がバラン

スを崩して増殖し始めるとその毒素の影響で、年寄りや子供のような免疫力の低い人は死に至る場合もある。だがいいか、大腸菌が毒素を出すからと謂って、もし大腸菌を完全に人間の腸から無くしてしまうと、今度は腸まで入ってきた毒性のある菌を食べて排泄する仕組みが失われて、人間はそういう毒性を持った菌に容易に身体を犯されてしまうことになる。例えばO-157を畏れて神経質になりすぎ、大腸内の大腸菌に出て行くような処理をするようなことはしてはまずいということだ。今回お前がしたことは外から進入したウイルスに対してだから、良い結果を招いた。道教で用いる太極図というのを知っているだろう。円の中に2匹の魚が交互補間の様な形で描かれた図だが、あの図でもっとも重要なことは、あれが陰と陽のバランスを現していることなのだ。陰は極まれば陽に転じ、陽は極まれば陰に転じると謂われるだろう。陰と陽は極で繋がっていて、実は同じ事象の両方の面を意味しているのだ。この世界の全ての存在はこの陰と陽の両方の要素で構成されている。だから人間の腸の内部も同じなんだ。養分を吸収する機能を持った腸の中には、沢山の太極菌が住んでいる。それは潜在的に毒素を有している菌を食して、排泄物として毒素を排出するという機能と栄養としてのタンパク質を作り出す機能を持っていて、人間の身体には同時に良い影響と悪い影響を与え、大腸を調和状態に保っている。だから、ビフィズス菌のような糖を分解して乳酸、酢酸を作り、腸内の環境を整えたり、花粉症などアレルギー症状の緩和にも貢献している善玉などと呼ばれる菌だけを増やそうとして、大腸菌を排除するようなことはやってはいけないのだ。大腸菌のような大腸の中で、悪役を演じて毒素を食して排出する菌が渾然一体として存在して、初めてバランスが取れているんだ。それで人間はあらゆる食物を安心して食することができるのだ。お前にはもう分かっているな。悪は悪としての働きがあるということ。今日は陰陽について説明する。陰陽学の最も進んだ教えに元極道というのがある。これは宇宙の創生から消滅まで全世界を元極図という太極図の中心に円を持つ図で表現して、その教えに基づいて道を指導している。おまえも、このあいだ中国の連華山に行っただろう。あそこで教えていることだ。こ

の中心に円を持つ図を用いてこの世界を表現したところがこの元極学の優れているところで、これまで何千年の間表現できなかった次元を超える部分、言ってみれば「秘中の秘」の部分の明確に説明できている。元極学では天地をマクロコスモス、人間をミクロコスモスとして捉えて説明している。これも方便なんだが、学ぶものにこの元極図で表された宇宙の根源に至るための功法を教えている。最も重要なことはバランスだ。釈迦の教えた中道なども明快に説明し尽くしている。元極学では心を開発することをその中心目標に据えている。心には天心、地心、人心の3つがあり、天心と地心は自然を統べる心で、人間をも包含している。人間には人心があり、その人心は天地のホログラムで元音、元光、元気という3元が高度に調和して、元音をその始原として生じる法則だと観ている。元音は情報、元光はエネルギー、元気は物質のことだ。賢、お前の考えている世界に通じるだろう。お前は元音の部分の自我の本体と定義しているが、それだけでは完全ではない。勿論、情報と謂うだけでも不十分だ。元音は振動を起こす基本理念だ。そこで起こされる振動は3次元的には元光、つまりプラナが供給され、凝縮されて物質化が起き、この世界が現れる。そしてその世界は自ずと発展する仕組みが組み込まれている。その物質が元気だ。それを霊的な側面から観察すると、元音部分に虚次元の振動が発生し、それにエネルギーが作用して、心が生じる。その心が慧心だ。これは肉体内にある肉体の心とは違う。この慧心は人間の体内の音を通して、情報交換を行うことで、元音に通じ、無なる根源に至ることができるのだ。そのための功法を元極学では教えている。その修練の段階は遙か無限の彼方まで繋がっている。元音の先にある無は有と同じだからだ。この慧心が、賢のいう意識に近いものだ。お前の謂う意識はこの慧心と肉体の心を統合したもののようにワシには思えるが、どうかな？」

「僕も連華山を訪れて以来、元極学には興味を覚えていました。確かにムクウさんのおっしゃるとおりのように思います。僕の考えている意識は、認識力を包含した慧心のような感じだと思います。修練を通して到達するような難しいものではなく、元々自分自身に備わった機能であると

捉えています。だから、やるべきことはあるがままの自分を極限まで浄化することと、意識を集中させるだけで、元極学の謂う無、僕の謂う本源的自己に到達できると考えています。全ての執着から離れ、自己を無にすることでそれは、達成されると思っています。だから厳しい修行で超能力を身に付ける必要などなくて、本来の自分に立ち返れば、それで自己の本源の形が現れ、超常的な能力も自然に顕現してくるものだと考えています」

「賢、お前はそれでいいだろう。だが、普通の人はそういうわけにはいかない。お前の謂う「本来持っている機能」を顕現させることがどれ程至難の業であるか、それに挑戦したものなら、誰でも知っている。また、その難しいという思いが足枷になっていることも事実だ。お前はクリシュナのように自由奔放に人を愛し、人に接し、この宇宙を認識し、この世界が真実体を写した世界だと理解していて、しかもこの現世で、普通の人として生きているから、全てが可能になって来るんだ。この元極学ではおまえの様な自由奔放な生き方では、無の状態に近づくことができないと教えている。心と徳を養い、それに功と呼ばれる修練を経て、初めて慧心の神髄に到達し、元音に至ることができるとしている。お前の自由な愛も他の人たちにとっては、鏡を曇らせる7情6欲の障害として立ち塞がるんだ。だから、絶えず内省と自律をして、私心や雑念を廃し、邪念を取り除いて正しい考えを培い、慧心を天心と合一させることで、本来の姿を顕現させることを教えているのだ。お前も意識してか、いつも内観と省察を行っているな。だがおまえの場合、自律は必要としていない。それはスワミ・ヴィリユーカナンダがお前にその特質を埋め込んだからだ。だから、元極学の教えはお前自身を導くものでなく、人々を導くときの方便として理解していなさい」

賢はムクウの教えを理解するために、もう少し元極学を学ぼうと思った。この教えは、これまで曖昧だった意識と自己の本質を結ぶ道を明確にしている様だと思った。ムクウとの通信を終えると賢はリビングに戻った。梓がテレビを観ていた。

「梓、何か変わった出来事でもあったのか？テレビを観ているなんて珍

しいじゃないか」

「ええあなた、「宇宙の無限遠点と素粒子の世界」という特番を観ていました。この前WEBのニュースに載っていたでしょう。無限遠点を観測していて、そこに素粒子の構造を発見したというニュース」

「確か、無限遠点を探求していたらミクロの極限素粒子のその先に見える無限小点が見えてきたっていう話だったな」

「ええ、この前は複素関数を使ったシミュレーションだったでしょう。ところが、今度は宇宙望遠鏡で極限まで観測していて、その先の方にとどの方向を観測しても同じ形態が見えてきたという話なの。そのことでパネルディスカッションをやっていたわ。天文学者と物理学者、数学者がパネラーだったので面白かったわ。もしそこにあなたか原さんが居たらもっと楽しいのにと思っていたのよ。だって、あのパネラーの方達は複素関数を議論していながら、この世界を3次元の物質的な視点でしか観ていなかったでしょう。あれでは問題は解決できないと思ったわ。エネルギーと、理念と云うか、公理的なものや云うか、そういう原理的なものを虚空間にまで適用しないと本当の姿は見えてこないでしょう？」

「うん、そうだね。ところで梓、明日の朝原さんと愛子が来るだろう。一緒に空港まで迎えに行ってくれないか？」

「勿論そのつもりです」

「朝1番だから食事して来ないと思うんだ。朝食を一緒に食べようと思ってるね」

「分かりました。客間の用意をしておいた方がいいですね」

「明日の朝でいいよ。僕も少し疲れたからもう休もうと思うけど、僕の寝室に来るか？」

「・・・私、お風呂に入ってきます」

梓は急にそわそわしてきて、直ぐにテレビを切ると、恥ずかしそうにそそくさとリビングを出て行った。

静岡

少しして、賢は小さな地震の様な振動を感じた。5秒ほどしてスマホがけたたましく鳴り画面に緊急速報の文字が表示された。賢がもう一度テレビを点けてみた。臨時ニュースをやっていた。

「臨時ニュースをお知らせいたします。先ほど東海地方でマグニチュード8.0の大地震が起きた模様です。震源地は駿河湾、田子の浦沖15キロの海底とみられています。各地の震度は以下の通りです。富士市田子の浦震度7強、沼津市震度6強、三島市震度6、静岡市清水区震度6強、静岡市震度6、焼津市震度6、伊豆の国市震度6、御殿場市震度5、浜松市震度5、伊東市震度5、熱海市震度5、下田市震度5、豊橋市震度5、小田原市震度5、藤沢市震度4、横浜市震度4、東京23区震度4、甲府市震度4、名古屋市震度4 そのほかの地域の震度はご覧の通りです。この地震による津波の発生が予想されます。駿河湾沿岸の地域の住民は急いで高台等、津波の届かない場所に避難してください。繰り返してお伝えします。先ほど東海地方で・・・・・・・・」

賢は臨時ニュースに見入った。夜中でもあり、被害の状況は全く分からないようだった。梓が入浴を済ませてリビングに入って来た。いつまで経っても賢が寝室に姿を見せないのが様子を伺いに来たのだった。ネグリジェにガウンを羽織っている。テレビを凝視している賢の近くに来て言った。

「どうしたのですか？何かあったのですか？」

「地震だ。東海地震のようだ。かなり大きい」

「あなた、どうしますか？」

「今なら救える人たちが大勢いるはずだ。これから富士市の周辺地域を俯瞰してみようと思う。先ず火事を起こさないようにすることだ。火の手が上がっている場所で初期消火を助けようと思う。全ては把握できないかも知れないが、可能な限り消火する。それから、津波の来る前に逃げ遅れた人を移動させる。そして最後に倒壊した建造物に避難通路を確保する。できるだけ多くの被災者を助け出したい。梓、一緒に行ってくれるか？」

「勿論です。直ぐに着替えましょう」

2人は直ぐに寝室に向かった。賢も梓も厚手の下着を身に付け、上着は動きやすいトレーナーに着替えた。賢は梓を連れて屋外に出ると、自分に掴まるように言った。梓は賢にしがみ付いた。賢は左手で梓を抱きかかえ、右手でバランスを取って空中に浮揚した。意識を駿河湾上空に定め一気に移動した。夜の帷に包まれた暗闇のあちらこちらに灯りが見える。それが照明なのか、出火の炎なのかを見極める必要があった。先ず富士市辺りの上空を旋回した。田子の浦の周辺に火の手が上がっている家が5、6箇所見えた。賢は先ず初めの1軒目の家の近くに降りた。そして直ぐに梓を放した。出火したばかりのようだった。直ぐにその家に飛び込もうとした。ドアに鍵が掛かっている。賢は近くの庭石を拾いドアノブを叩き壊した。やっとドアが開いた。中に入ると、家の中は壁が崩れ火元に通じる入り口の襖は倒れているようだ。賢は火元に近付いた。台所のような場所だ。火が広がりつつある。炎の明かりで辺りが見極められる。煙が充満していた。賢は意識を全開にして消火器を探した。幸い消火器は用意されていた。出火している火の中だ。賢は自意識を捨てて火に飛び込んだ。手探りで消火器探し、そして掴んだ。消火器は酷く熱い。意識を集中させ消火器の熱をニグレクトした（消した）。本体を抱えてノズルを握り直ぐに消火を行った。どうやら電気炊飯器周辺から出火しているようだった。あまり延焼していなかったのが幸いして、火は消化剤の噴霧の威力に負けて直ぐに消えた。奥の部屋から泣き声が聞こえてきた。賢がその泣き声の方に向かうと、梓が一人の老婦人を抱えるようにして出て来た。

「あなた、この方は転倒した箆笥の直ぐ横に倒れていました。箆笥の下敷きにならずに済んだようです。お一人で住んでいるようです」

梓が連れて出て来た女性を抱きかかえ、賢は近くの丘の上まで空中浮揚で移動した。そこに不安がる女性を一人残して再び梓の元に戻った。着地すると直ぐ、賢を待っていた梓を抱きかかえて再び空中に浮揚した。先ほど見えていた火が3カ所に減っていて、新たに遠方に大きな火炎が見えた。幸い工場群の中からの出火はないようだった。賢はさすがに東

海地震に備えている地域だけのことはあると思った。次は街中だった。その時、津波の第1波が海岸に押し寄せてきたようだった。津波は海岸地域に押し寄せているらしいことが分かった。しかし、それはどうすることもできなかった。賢は東日本大震災の津波を思い出した。あの惨劇が再び起きるのかと息を呑んで見守った。波は高かったが、エネルギーはそれほど大きくないようだった。上空から観ていると、港周辺の建造物や電柱などをなぎ倒し、川に沿って海岸線から200メートルほど入ったところまで到達すると、津波は徐々に引いていった。富士市湾岸の防波堤が上手く機能して、津波の侵入を食い止めたようだ。街中に上がっている火の手はどうやらレストランの様である。電線がショートして火花が散っている。賢はレストランの近くに降りた。梓は直ぐに周辺の人々の動きを見た。24時間営業のレストランのようだったが、客が出て来る気配は無い。レストランの窓ガラスはことごとく割れていた。入り口付近は半壊していて中に入れない。裏の入り口に廻った。その奥の屋根から炎が上がっていた。賢は通用口のドアを開けようとした。なかなか開かなかったが、何とか力でこじ開けて中に入った。その入り口はレストランの厨房に繋がっていた。男性が倒れてきた棚の下敷きになって唸っていた。賢は梓と力を合わせてその棚を持ち上げた。ステンレス製なのでとても重い。懸命に持ち上げて何とか男性を引っ張り出すことができた。

「どこか怪我はありませんか!？」

「だ、大丈夫です」

「それは良かった。ところで消火器はありますか？」

男性は、苦しそうにしながらも応えた。

「あっ、あの奥にあります」

男が指さした方向にはまだ火が廻っていなかった。賢は直ぐに男性の示した所に行って消火器栓を取り上げると、ホースを外し火の元に向けてレバーを握った。勢いよく消火剤が噴射し、火の元は直ぐに消火できた。しかし、火は既に天井まで延焼していた。油に引火して燃え上がった炎が原因のようだった。賢は直ぐに水道に向かい、ボールに水を汲み、そ

れを天井に向けて掛けた。火力が強くどうにもならない。下敷きになっていた男がびっこを引きながら水道ホースを手にして賢の近くに来た。賢は直ぐにホースを水道の蛇口に繋ぎ天井に向けて放水した。火はなかなか収まらない。炎の熱気に耐えながら5分ほど放水を続けてやっとの事で消火できた。

「他に誰か居ませんでしたか？」

「ウエイトレスが2人居たはずです。店舗の方に・・・」

賢と梓は黒く焦げた扉を蹴飛ばして店舗内に入った。天井が落ちていて、そこはまるで溶岩洞窟のような暗闇と化していた。賢は透視で人の意識を探した。3人の意識が見付かった。1人は直ぐ近くに居た。手探りで落ちた天井の下を這うよう進むと、1人の人間が小さな声で、「うーん、うーん」と唸っていた。それは女性のように感じた。どうやら、怪我は負っていないようだ。賢はその女性の手を引っ張った。

「えーん、えーん、えーん」

女性は泣き出した。賢は屈み込んで女性を抱えるように抱き起こすと、引き摺るようにして入り口のドアまで運び、ドアのところで待っていた梓に預けた。そして再び奥に入って行った。暗闇の中で賢は眉間の第3の目を開いた。ずっと奥の方にもう2人の人間が居るのが分かる。一人は生命力が弱っているのがはっきり認識できた。もう一人は朦朧とした意識の状態にいるようだった。賢は倒れたテーブルや椅子をかき分け、天井に附いていたと思われる照明器具を避けながら、すぐ近くに2人の意識を感じる場所にたどり着いた。その時、また大きな揺れが起きた。余震だ。天井が更に下に押し下がった。

「助けてー、助けてー」

一人が叫んでいる。女性ではなく男性だった。男性は落ちた天井板とテーブルの間に挟まっていた。賢は満身の力を込めて天井を押し上げようとしたがびくともしない。その男性は単に挟まっているだけのようだったので、賢はテーブルの脚を1本握って思い切り引きちぎった。何とか脚は取れたが、まだ男性は動けないようだった。もう一本の脚を引きちぎったとき、男性は机の表面を滑り落ちて、床の上に身体が転げた。

「大丈夫ですか？」

「ありがとうございます。助かりました。どうも肋骨をやられたみたい
です」

「辛いでしょうが少し待っていてください。もう一人居ますから、彼女
を助けたら僕に附いて来てください」

賢は女性が椅子の横に倒れているのを知った。手探りで女性の顔を探ると、少し力を込めて平手打ちした。女性は気が付いた。

「あ、あああ、ああ、ここはどこ？」

「レストランの中ですよ。地震で倒壊しています。意識をしっかりと持って僕に附いて来て」

賢は2人を連れて、這うようにして入り口の扉まで辿り着いた。梓が心配そうに奥の暗闇を覗き込んで待っていた。既に2人を外に誘導したと言った。賢と梓は2人を連れて外に出た。そこには先ほど厨房に居た男性と、ウェイトレスの女性が街灯の灯りの下にしゃがみ込んで居た。賢は4人に言った。

「皆さん、まだ余震が来るかも知れませんからできるだけ安全なところに避難してください。明日の朝になれば救助隊が来るでしょう。でも、もしできるようでしたら、ご自分達で行動してください。くれぐれも注意して」

そう言い残すと、賢は梓を抱きしめて再び空中浮揚した。4人はあっけにとられて、暗い夜空に消え去った賢たちを見上げていた。

「あなた、あの工場の中から火が上がってきました。どうしましょう」

「行ってみよう。多分、消防隊が来ているだろう」

賢の言うとおりに消防隊が来て、消火活動を開始していた。火は激しく燃えて塀の中に立ち昇っている。

「塀の上端には鉄条網が張られているぞ」

消火隊の隊員の一人が駆け寄ってきた隊員に向って叫んだ。

「ホースの長さは届くが、鉄条網を超えるか、それができなきゃ、塀の各所に設けてある20センチくらいの四角いデザイン窓からホースを入れるしかない」

駆けつけた隊員が応えた。何人かがその工場の中に入ろうとしていたが、反対側にある正門の鉄門扉には鍵が掛かっている、その門扉の上端には鉄矛が組み込まれているようだった。賢が言った。僕が中に入ります。誰か一緒に入ってくれる人は居ますか？

「どうやって入るって言うんだ？」

「僕に掴まっていてください。飛び越えますから」

訳が分からないまま逡巡している消防隊の男を抱き寄せて、賢は一気に塀を飛び越えた。消防隊員達は首を横に振ったりして、自分の意識が正常かどうか確かめていた。塀の反対側に降りた賢は消防隊員の男に自分から離れるように言った。男は賢の背に廻した腕を解くと、迷う様子も見せず急いで塀のデザイン孔の処に行き、反対側にいる隊員に直ぐにホースを差し込むように叫んだ。隊員は差し込まれたホースを引っ張って燃えさかる炎に近づき、放水管を構えてから「放水準備完了」と叫んだ。ホースがピンと張ってきて水が勢いよく噴き出した。1本のホースでは十分ではないようだった。賢はあと2人を塀の中に連れて来た。3本のホースの放水で、広がっていた火はようやく弱まった。賢は塀の反対側に戻り、梓を抱きかかえて再び空中に浮揚した。2人は次々に初期消火を助けた。富士市の火災発生を抑えると、そのまま沼津市に向かった。暗闇の中でも、多くの建物が倒壊しているのが分かる。沼津市では大岡地区の池近くの住宅地と駅前に既に火災が発生していた。他の地域は地域防災の働きで、初期消火が功を奏していた。小火程度の火災はあるようだったが、地域消防団が出動して対処していた。大岡地区の火災はマンションだった。そこは消防隊が出て消火に努めているようだった。駅前の火災はパチンコ店から出火していた。賢は意識を全開して店舗全体をスキャン（走査）してみたが、人間の意識はなかった。閉店後の出火だったので人災は無かった。しかし、店がプラスチックを使った機器を多用していた為、火の勢いが強く直ぐに延焼しそうな様相を呈していた。賢は兎に角、延焼を食い止めることにした。パチンコ店の周囲にバリアを張ることにした。瞑想状態に入り、別次元でシリコンのバリアを構築し、それを現実界に移動してパチンコ店の周囲に高さ15メートル

ルの半透明で不燃のシリコン・バリアを張り巡らせた。炎は上がっていたが、それはあまりにも奇妙な光景だった。バリアの中にだけ炎が上がっている。周囲の建物は何の影響も受けていない。それを見た人々は恐れおののいた。

「これは天罰を受けた地獄絵だぜ」

「見ろ、まるで、パチンコ店だけが焼かれているようだ」

「神のなせる技だ。金のために、俺達の欲望をあおって、そのあげく苦しみのどん底に落としてきた罰が当たったんだ。俺も此処にはずいぶん吸い取られたんだ」

賢は梓を伴って清水に移動した。静岡市の緊急放送がけたたましいがなり声を上げていた。清水も地域防災組織が機能しているようだった。出火は見当たらない。地震発生が深夜であったことも幸いしたようだ。しかし、灯りはほとんど灯っておらず漆黒の闇であった。海の近くに集中して点灯しているいくつかの照明が目に入った。その照明に近付くと、どうやらそれは船舶の航行をガイドする為の照明のようで、周りの照明が全く点灯していないところから見ると、それが自家発電で点いていることが分かる。津波が引いた後でも明かりの点っている建築物があることに賢と梓は驚きを隠せなかった。周囲の暗さからして静岡、清水地区全域が停電しているようだった。上空から見ると月影に浮かんだ建物の中に倒壊した家々が沢山あるのが分かった。賢はそこから一気に上空に上昇し、海上方向に移動して滞空した。富士市より東側の遠景には光が伺えたが、それらは火炎の光ではなかった。西側は闇に包まれている。駿河湾沿いに、人々の苦しみの波動が感じられた。賢は瞑目して神に人々の安寧を祈った。瞑目を解くと既に夜明けが近づいてきているのが分かった。東方の伊豆の山々から箱根に掛けて、空がほんのり青紫色に色付いてきた。賢は梓をしっかりと抱きかかえると一気に自分の家に移動した。家の中に入って直ぐにテレビを点けた。夜明け前なのに臨時ニュースが放送されている。「東海大地震発生」と謂うテロップが流れていて、キャスターがヘリコプターからの実況を中継していた。

「激しい地震の揺れによる、倒壊した建物があちらこちらに見受けられ

ます。しかし、どこにも火の手は上がっていないようです。やはり、予想された東海地震に備えて、静岡県で実施した対策が功を奏しているようです。JRおよび私鉄各社では安全性が確認されるまで、東海道線、東海道新幹線をはじめ東海地域の全ての電車の運行を停止すると発表しています。まだ、被害の状況は分かっていません。それでは一旦、静岡県の中部・東部地域上空からの実況中継から、静岡支局にカメラを戻します」

「あなた、火災の発生は押さえられたようですね」

「うん、地域防災が機能したようだな。よかった」

梓が電話機の留守電ランプが点灯していることに気付いた。賢が再生ボタンを押すと、原からのメッセージが聞こえてきた。

「賢さん、羽田からの便は運行されているようですから、予定通り愛子さんと一緒にそちらに伺います。東海地震の救済支援を一緒に行いましょう。そちらに着いたら相談しましょう」

梓が言った。

「原さんはどういう支援をしようとしているのかしら？」

「多分、物質転送機を使うつもりじゃないのかな。道路が寸断されているだろうし、不通になっていない道路も、渋滞で動きが取れないどころから、救援物資は空輸するしかない。空輸だと末端まで直ぐには届きにくいだろう。物質転送機があれば鬼に金棒だからね」

「そうですね。原さんは人々を救済するという意識が強いのですね」

「原さんの意識の中には、全ての存在は自分と同根という意識がしっかり根付いているからね」

「あなた、少し休んだ方がいいわ」

「そうだね。梓、一緒に2時間だけ寝よう」

4時35分過ぎだった。2人は賢の寝室に行き、パジャマに着替えてそのままベッドに潜り込んだ。梓は賢の懷に抱かれてまるで真綿の中にあるような心地よさを覚え直ぐに眠りに落ちた。

原と愛子がEXITから出て来た。愛子は姿を現すと、直ぐに賢たちを

見つけ右手を大きく振った。左手でトラベルバッグを引いている。原は大型のスーツケースを引いていた。

「賢パパー！ 梓さーん！」

眠気も吹き飛ばすような愛子の声に、2人とも右手を振って応えた。原と愛子が姿を現した後、15、6人の普段着のままの人たちが出て来た。急いで飛行機に飛び乗りでもしたような印象を受ける。疲弊した様子が覗えた。大勢の出迎えの人たちが来ていて、声を掛け合って無事を確認しているようだった。中には手に包帯を巻いている人もいる。

「あの人達、地震の被災者みたいよ」

愛子が小声で言った。賢は人々の意識を見つめた。多くは地震の災害から逃れて来た人たちだった。

「賢パパ、飛行機に乗る前、亡くなった人が150人と書いていたけど……」

「愛子さん、私たちが家を出て来る時は、もう1,377人になっていたわよ。大きい地震だったから亡くなった方達は広域に渡っているようなのよ」

「真夜中だからね。みんな自分の家に帰っているだろう。大勢が一カ所に集まっているのは、ホテルとか深夜営業している飲食店なんかだろう。そういうところで大量の犠牲者が出ない限り、被災者は広域に分布するだろうな。ところで原さん、被災者の救済について何か考えているのですか？」

「はい、僕たちは今、2つの画期的なシステムを所有しています。一つはオーラ・ビジョン・システム、もう一つは物質転送機です。この2種類のマシンを使うと、かなりのことができます。会社の運営は実質的には副社長に任せてありますから、僕は暫くの間、賢さんと一緒に支援活動をしたいのです。賢さんいかがですか？」

「僕もそうできたらいいと思っていました。救える人は救い出す。それが僕らのすべきことでしょう。1週間が勝負でしょうから。一緒に頑張りましょう。それで、何か具体的なアイデアがあるのでしょうか？」

「ええ、先ずオーラ・ビジョン・システムですけど、こちらは行方不明

の人の消息を調べたり、連絡を取ったりするのに役立つと思います。改良を加えたんです。物質転送機のノウハウを応用して、特定位置が分かれば、そこに存在する人間の意識の波動をとらえて通信できるようにしたんです。これは被災者の捜査に有効です。物質転送機は、倒壊した建物の中の生存者のところに救援物資を送り付けるのに役立ちます。本当は瓦礫を空き地に移動するのも役立つと思いますが、そんな大きな装置は作っている時間がありませんから、直ぐには無理ですけどね」

「すごいじゃないですか。この2つのマシンがあれば救援活動の効率が飛躍的にアップします。それで、原さんが最後に言った部分は、もしそういうことが必要になったときは僕が時空を替えてやってみます」

「そんなことできるのですか？」

「人間の本来の機能にはそんな部分も含まれていますよ。もうじきそういう時代になります。旧約聖書やマヤ暦の終焉で預言されている世界ですよ。エジプトのピラミッドやインカの石積みなんかもそういう人間の能力を用いて造られたんだと思います。僕は最近、新しい時代の人々が持つことになる人間本来の機能を使えるようになってきていますから、その機能を駆使して可能な限りやってみます」

「そうですか、それは心強い。賢さん、それともう2つあります。実際に被災してしまった人々の救済と、被災地域の人々の生活支援です。いずれにしても、まず大けがをした人たち、精神的に混乱状態になってしまった人たち、それから亡くなった人たち、この人達をどう救うかです」

「これは難しい問題ですが、今、祐子と亜希子がやっていることですね。僕たちも参加してゆきますが、これは亜希子の様子を見て手伝って貰いましょう。死んだ人の救済はそう簡単じゃありません。先ず、迷っている人の数が多いことです。ですから、時空を超えて様々な活動することになりますので、亜希子が適任でしょう。まだ亜希子はクリミア・コンゴ出血熱から回復したばかりですから、あまり無理はさせられません。少し時間をおいてから、亡くなった人たちの救済を援助して貰いましょう。勿論僕もやります。怪我をした人たちにはオステオパシーの様に本来自分の中にある自己治癒力を生起させて、自ら治って貰うのが一

面白いと思います。僕のやり方は細胞達と話をするやり方です。人間に埋め込まれている、アポトーシスの機能を一時的に変更する必要があります。これは細胞自身に変化して貰うしかないのです。でも方法を間違えると、癌に変化してしまったり、正常な細胞を死に誘導して、壊死状態にしてしまう可能性もあります。だからミトコンドリアとの対話は慎重にやらなくてはなりません」

「賢さん、そこまでやるには凄いパワーが必要になるでしょう。現実的に可能なのでしょうか？どこまでやるつもりですか？」

「確かに、自分の力を使ったら、直ぐに疲弊してしまいます。ですから、宇宙に遍満しているプラナのエネルギー供給を受けて、それを使って進めることが重要になります。ポイントは意識の純粹性と集中です。出来るところまでやりましょう。現在の状況が負のピークに到達したら、自然に回復基調に移行すると思います。そしたら手を緩めても大丈夫でしょう。それまで大体1週間が勝負ですよ」

梓と愛子は口を挟むことができなかった。2人の会話はこの時代のものではないと梓は思っていた。やがて賢の家が見えてくると、愛子が言った。

「賢パパ、まさか、この家が賢パパの借りている家じゃないでしょうか？大きすぎるもの」

「愛子、ここだよ。夜になると幽霊が出たり、ナイフが空中を飛んだりしていたから、誰も借り手がなかったんだ。だから安く借りられた。けどもう幽霊は出ないから大丈夫だよ」

「賢パパ、私、お化けなんて怖くないよ」

「そうか、それじゃあ今夜もう一度出て来てもらおうか？愛子に紹介するよ」

「うっ、うそよ。冗談よ。やっぱり、お化けは出ない方がいいから」
原が笑った。賢は車を駐車場に着けた。車から荷物を降ろし、原はそれを重そうに持ち上げるようにして運びながら玄関に向かった。梓が言った。

「愛子さん、オーラ・ビジョン・システムで亡くなったお母さんと話を

しているでしょう。あのときは怖くなかったんですか？」

「勿論一人ではできなかつたよ。原さん達が居るからできたのよ。たとえお母さんだって、初めは幽霊だと思っていたから怖かつたよ。死んでいるお母さんが怖かつたの。幽霊みたいで……でもお母さんはお母さんでしょう。もう大丈夫よ……」

「愛子はまだ死後の世界があることに確信が持てていないから、無理ないな」

賢が玄関の鍵を開けると、原と愛子はきょろきょろしながらリビングに入った。

「ひえーっ、すごいいじゃない、賢パパ、大きな部屋ね……ねえ、原さん」

「そうですね。ここは広くていいですね。いろいろな実験ができそうで、賢さん、こことは別に趣味の部屋がありますよね？」

「ええ、ありますよ。何に使ってもいい部屋です」

「先ず地震情報を見てみませんか？テレビ、点けてもいいですか？」

原がそう言うと、梓がリモコンでテレビの電源を入れた。東海地震速報が続いていた。死者数が3, 794人になっている。テロップに富士市の中央公園周辺の映像が出ていた。ビルが倒壊している。かなりの数の家が崩壊しているようだ」

「一度、被災地に行ってみないと状況把握は難しいですね」

「原さん、もう行って来ましたよ。梓と一緒に地震が発生した直後に行って、初期消火を支援して来ました。夜だったからよく見えなかつたけど、こうしてみるとかなりの数の家が倒壊していますね」

原は賢の迅速な対応にも驚きの表情は示さなかつた。

「賢さん、直ぐに趣味の部屋に行きましょう」

原が何故そんなに性急なのか賢には分からなかつたが、言われるとおりの趣味の部屋に原を案内した。梓と愛子も男性2人の後に附いて行った。部屋に入って賢は驚いた。いつの間にか部屋の真ん中に1メートル立方の装置がある。原がにこにこ笑いながら言った。

「やあ、上手くいきました。こいつ、自分で自分を転送できたんですよ。」

こいつの兄弟がこいつをここに送ったんです」

それは試作が完了した物質転送機だった。原は部屋の隅に置いてあるOVSの裏蓋を開けて中のモジュールを取り外し、部品を差し替えている。「まだ、ちょっと格好が悪いですけど、機能は最終仕様になっています。これなら1メートル立方程度までの品物を転送できます。もっともそれは仕様値で、実際は2メートル立方くらいまでの空間を切り替えられます」

「凄いですね。完成したんですね」

原はOVS内部の修理を終え、裏蓋を元に戻しながら賢を振り向いて相槌を打った。

「賢パパ、原さんはずっとあまり寝ていないのよ。原さんのお世話が大変よ」

「ええ、愛子さんには何時も助けてもらっています」

賢は微笑みながら2人をねぎらうように頷いた。梓は突然現れた物質転送機にあっけにとられて言葉が出なかった。

「賢さん、小動物の転送には成功しましたが、まだDNA、RNAなど生態への影響はほとんど検証できていませんから、生き物の転送はしない方がいいと思います。それと、アクティブエリアの定義を明確にしておかないと危険が伴います。勿論アクティブエリアに半分だけ係った状態で転送動作をさせようとしても、エラーするようにはしてありますが、物質によっては一つの構成物としての結合が弱い場合、その遊離している部分が、分離して転送されてしまう危険性がありますから。まあ、人間の作った製品に限定しておいた方がいいと思います」

「原さん、この東海地震で死者と負傷者、行方不明者は大体どの程度になると考えていますか？」

「僕の試算では・・・と言っても、完全に条件把握ができていませんけど、不明な地域の情報グローバル・アースからの情報でしか得てませんが、そのデータを使った試算では、死者は35,500人、負傷者は中程度以上の場合378,000人、行方不明者・・・これは時間の経過に伴って数値が変化しますが、ピーク時で147,000人と観

ています」

「どうして、そういう計算ができたのですか？」

「それは、別の地域における過去の大地震のデータと、今回の地震の震度、建築物の耐震構造適用率、地域別年齢構成、遊興施設の種類と、収容人数、そのほか30種類ほどのデータを用いて統計的演算で予測しました。試算したデータの信頼度は75パーセント程度ですけどね」

「原さんの頭はスーパーコンピューター並みですね。35,500人と378,000人、半端じゃないです。こうしている間にも、亡くなっていつている人たちがいるんですからね」

「ええ、だからできるだけ早く救援活動に移りたいんです」

「それじゃあ、一緒に救援活動をしながら事業計画を討議しましょうか？本当はそういうやり方は好きじゃないんですけど・・・」

「そうですね。僕も同時並行処理は好きじゃないんですが、こういう緊急の場合は仕方ないですね。まあ物質転送機の事業形態については、大体案が固まってきていますから、賢さんが同意してくれば直ぐに結論が出せると思います」

「さすがに原さんですね。手早い」

賢は梓に、愛子を連れて家の中を案内してやるように頼むと、原と2人で物質転送機の試験運転を行った。原が電源を投入して初期設定を行った。スーツケースから赤色のビニールテープを取り出し、賢と協力して床に直径1メートルの円形に貼り付けた。その円内をアクティブエリアに設定し、テープ上に「アクティブエリア=危険領域」と書き込んだ。賢と原はリビングに戻り、テレビのチャンネルを操作して救援活動の情報を探した。やはり富士、沼津、清水地域の建物の倒壊が目立っている。特に沼津から富士に至る根方地区と原地区の地盤が緩いようで、液状化現象と道路の陥没、家屋の倒壊が多いという情報を得た。賢は早速、原と一緒に、オーラ・ビジョン・システムを持って、その地域に移動することにした。賢が言った。

「原さん、このOVSは100ボルト駆動じゃないですか？電源が問題になりますね」

「大丈夫ですよ。バッテリー駆動用にインバータ回路を内蔵しています。OVSが使われる場所は屋内だけとは限りませんからね。車のバッテリーでも駆動できますし、専用のリチウム・イオン・バッテリーでも駆動できます。但し充電器で充電しなくてはなりませんけど。予備のバッテリーを2個持って来ました。2個じゃ少ないかも知れないですけど、3個あれば1日中使っても大丈夫ですから」

「準備がいいですね。僕はOVSのような大きな機械を持ってテレポする自信がありませんから、先ず僕が位置情報端末を持って沼津の根方地区に移動して、そこで場所を確保しますからそこにOVSを転送してください」

賢と原は梓を呼んで、これから救助活動に入るから支援物資の入手をして欲しいと言った。梓はその一言で自分のすべき行動を理解した。愛子連れて車で札幌市内に出掛けることにした。賢はメモ用具や救急薬品などの入った腰ベルト式バッグに携帯情報端末を押し込むと、それを腰に付け、直ぐに根方地区にテレポーションを行った。沼津私立救済病院の近くの農道に入り込み、位置情報端末の電源を入れてから、農道の中央に置いた。賢はスマホで原に電話を掛けた。原がOVSを送ると言った。賢は位置情報端末を取り除いた。その時、前方から1台の乗用車が走って来た。どうやら混雑している車道を迂回するつもりようだ。賢は両手を横に広げて道路の中央に立ちはだかった。乗用車が止まり人が降りて来た。50歳くらいの背広を着たビジネスマン風の男性である。「どうしたんですか？ここも通行できないんですか？」

「はい、少しの間待ってください。今この道の中央に、ある装置が転送されてくるのです」

「何を訳の分からないことを言っているんだ。俺は急いでいるんだ。通してくれ」

そう言うか言わない内に、賢の後方の道路の中央にオーラ・ビジョン・システムが現れた。男は驚嘆した。

「なっ、何だ！何ですか？これは？今どうやったんですか？」

「これは、オーラ・ビジョン・システムという機械です。地震の被災者

を救出する為に使おうとして、物質転送機で転送してもらったんです」

「な、な、何と……」

男は言葉を失った。

「あの一、この辺りで一番被害の大きかった箇所をご存じありませんか？」

「そりゃ、あんた、市立病院だろう。あそこは倒壊しなかったけど、大勢入院しているからな。ああ、そうだ、この向こうの原の市営団地のビルが何棟か倒壊していたよ」

「お急ぎのところ申し訳ありませんが、僕をそこに連れて行ってくださいませんか？」

「原団地か？まあ、俺も忙しいけどこういうときだから連れて行ってやるよ。その機械も持ってゆくんだらう？」

「はい。これは倒壊した建物の中に閉じこめられている人の、生存の確認に使うのです。それと瓦礫の下の人と話すこともできます」

賢は車のトランクを開けてもらってOVSを積み込み、助手席に乗り込んだ。男はこの近くにある沼津ハヤブサ運送という運送会社の社長で、これから自社の配送拠点に被害状況を確認に向かうところだと言った。

「あんた、さっきから変なことを言っているな。それに変な機械も出てきたり、一体あんたはどういう人なんだね？」

「最近、オーラ・ビジョン・システムを発売した会社の人間です」

「それが、あの道路に出て来た機械かね？」

「ええ、そうです」

「それはどんな機械だね？」

「死んだ人と話が出来る機械です」

「ええ!?何だって？あつ、ああ、そういえば変な機械が売り出されたって聞いたことがあるな。それがあの機械なのかね？」

原団地は2棟のビルが横転しており、1棟が陥没して傾いていた。横転したビルは、上方に向いている入り口のドアが開いている部屋もあるが、そのほとんどは変形して開けられない状態になっていた。周辺の道路は電柱が倒れたり、倒壊した家の塀などで、ほとんど通行ができない。既

に空中に2機のヘリコプターと数機のドローンが飛行しており、救助隊の男達4、5人が倒壊したビルの上に登って、ドアを開けようと必死になっていた。賢は車から降りてOVSを降ろすと、運転席に廻って男に礼を言った。男は車の窓から顔を出して名刺を差し出した。西山久志という名前だった。賢もウチミシステムズの名刺を渡した。西山は名刺を受け取ると、それを胸ポケットに入れてエンジンを吹かし今来た道に戻って行った。賢は先ず原に電話を掛けた。原は自分もそこに行きたいと言った。賢は了解すると、オーラ・ビジョン・システムを倒壊しているビルの脇に置き、直ぐにテレポーションで家に戻った。それから待っていた原に背中に掴ませると、直ぐにOVSの脇に戻った。その間およそ5分ほどだったが、自主防災の救助活動をしている男達の内の一人がOVSに気付いて、そこに来てマシンを覗き込んでいた。ビルの周囲には近隣の者達が集まって来ていて、救助活動を見守っている。手を出そうとして救助隊の者に制止される者もあった。賢は覗き込んでいた男に言った。

「このマシンを使えば、中に閉じ込められている人の消息を確認できます。この住宅にはあと、どの位の人が救出を待っていますか？」

「人数は分からないけど、この建物については32軒の内、ドアが開いたのは5軒だけです。残りは何とかドアを開けようとしていますけど・・・」

隊員達はバールを使ってドアをこじ開けている。原が頭にヘッドギアを着けOVSの電源を入れた。画面はノイズのような状態を表示した。賢が原に尋ねた。

「確かOVSは画面を見て、音声を聞く人の脳波から情報を得ているんじゃないかな？原さんがヘッドギアを付けても原さんの脳にはこの団地の人たちの記憶は記録されていないんじゃないんですか？」

「その通りです。さっきも言ったように、改良版のOVSは対話の相手が存在している位置を確認できる場所にさえいれば、誰でもその人と通信できるように改造したんです。脳波から相手のイメージを構築する機能は働きませんから映像は映りませんが、音声の通信は可能です。物質

転送機の位置情報から時空間を抽出する機能の応用ですよ。さっきマシンのROMを入れ替えておきました」

賢は底知れぬ原の能力に一瞬言葉を失った。一呼吸置くと賢は扉の開いていない家一軒ずつ順番に部屋の奥に意識を移していった。最初の家は最上階の4階の端の家だった。家の中を透視してみた。2人が折り重なるようにして倒れている。しかし、意識を捉えることはできなかった。その隣の2軒目の家にはやはり2人居るのが分かった。1人の意識は確認できた。賢はその家の表札から戸主の名前を読み取った。時村宗二と謂う名前だった。賢はそのことを原に伝えた。原はその名前と所在地の情報を確認し、そこにいる意識に向けて会話を開始した。

「僕の言葉が分かりますか？分かったら、心で返事をしてください」

「は、はい。私、どうなったのかしら？真っ暗で何も分かりません」
応えているのはどうやら女性のようにだった。

「ご家族は、何人いますか？」

「夫・・・が、でも・・・どこに・・・」

「しっかりしてください、今助けに行きます」

賢が救助隊に時村家の扉を開けるように伝えた。救助隊は直ぐに4階の部屋の上へ移動し、4人掛かりで扉をこじ開ける作業を開始した。要領が分かってきたようで、5分ほどで何とか扉を開けることができた。隊員の一人がヘッドライトの付いたヘルメットを被り、ロープを身体に巻き付けて、部屋の中に降りて行った。隊員の声が聞こえてくる。

「もう少し降ろしてください。キッチンのテーブルで先が塞がっています。少し脇を通って下ります。居ました一人、女性の方です。もう一人いるようですが・・・こちらはNGです。女性の方を救助します。だれか支援をお願いします。救助用のロープを降ろしてください。女性は怪我をしています。救急具も用意してください」

部屋の中で悪戦苦闘しているようだったが、15分ほどで女性を入り口から引き上げることができた。

「・・・夫が、中に居ます。助けてください・・・えーん、えーん」

女性は泣き叫んでいる。しかし救助隊は女性を引き上げ、更に梯子とロ

ープを使って地上に降ろすと、次の部屋に移動した。その間に賢と原は全ての家の中をスキャン（走査）し、住民の生死を確認してしまった。賢はそれを一覧表にして隊員の一人に渡して簡単に説明した。隊員は、賢たちから最初に受け取った情報の正確さを理解していたので、賢の説明を受け入れたようだった。賢と原は次のビルに向かった。そこのビルにも救助隊員達が活動していた。賢と原が近付こうとしたが、どうしても立ち入ることを許さない。賢は原に言って先ほどと同じような調査を始めた。しかし、隊員達を説得するのがまどろっこしく感じてきて、自分が直接救済を行う決意を固めた。隊員達は必死になって、端から順に扉を開けていこうとしている。賢はこの建物についても救済可能な人々の一覧表を作成した。このビルの住民で室内に残された人たちの内、およそ半数の27人が生存していることが分かった。賢は救助隊が作業をしていない部屋から順に中に入ることにした。このテレポーテーションはきわめて危険だった。移動したときの空間が確保されているかどうかを事前に確認しなくてはならなかった。賢自身が存在する空間を確保することが絶対条件だった。横倒しになっている部屋の中には様々なものが散乱している。室内は暗闇で透視はほとんど効かなかった。原が順次対話して状況を確認し、空間の有無を調べていった。1階と2階で生存が確認できているひとたちの部屋には空間が確保できているようだった。端の家から始めた。そこには子供2人と父親の計3人が生存していた。賢は先ず室内の空間にテレポーテーションした。2人の子供達は泣いていた。賢は父親に言った。

「おとうさんですね。大丈夫ですか？怪我はありますか？」

「なな・・・なんと、あなたは一体・・・は、はい、脚を挫いたようです。激痛が走り、力が抜けて立てません。どうやら、この建物は倒れているようですね。子供達を助けてください。私は、このまま死んでもいいですが、子供達だけは・・・」

「パパ・・・パパー・・・」

「えーん、えーん」

2人の男の子の声が聞こえた。

「やってみます。まず、お子さん2人・・・ここに居ますね・・・ああ、ここだね・・・君たち、おじさんに齧り付いて、いいね。絶対離れてはいけないよ。それじゃあ、おとうさんはもう暫く待っていてください」

そう言うと、賢は2人の子供をしっかりと抱き締めて、原の隣にテレポーターションした。賢が2人の男児を抱えて現れたのを目にした隊員の1人が、駆け寄ってきて叫んだ。

「どっ、どうやって？」

「後で説明します」

そう言うと、賢は再び同じ所にテレポーターションした。暗闇で手探りすると、先ほどの父親に触れた。

「おとうさん、お子さんは助かりましたよ。さあ、僕の身体にしっかりとしがみついていてください。移動しますから」

賢は直ぐに原の後方の、人の居ない地上にテレポーターションした。子供達から話を聞いていた隊員が驚嘆した。

「どっ、どうなっているんですか？ どうやって、この人達を救出したのですか？ どこから出て来たのですか？」

賢は1階の一番端の家の扉を指さした。

「あその家です。協力してくだされば、もっと確実に生存者を救出することができますけど・・・」

父親がコンクリートの地面に座って2人の子供達を抱き締めている。父親は賢に向かって両手を合わせた。隊員は仲間の処に走って行った。賢は次の家にテレポーターションすることにした。端から3軒目の家だ。

1人住まいの女性の家だった。賢がテレポーターションすると女性が言った。

「ああ、神様、お救いになってくださるのですね。ありがとうございます。あなた様の金色の輝きがひずるしく（まぶしく）感じます」

「立てますか？」

「はい、わたくしはずっとお祈りしておりました。神様ありがとうございます」

「僕は神様じゃないですよ。いいですか、僕の身体にしがみついでいてください。今から外に出ます」

賢は女性を抱えてテレポーションした。今度は原から少し離れた空き地に現れた。そこが地上であることを認識すると女性は賢から離れて地上に平伏した。

「神様、ありがとうございます」

女性は顔を涙でぐっしょり濡らしている。先ほどの隊員が別の2人の隊員を連れて来た。先ほどの隊員は、女性が助け出されている事実を受け、更に驚きを深めたようだった。

「先輩、この方は普通の人じゃないようです。この方の情報に従って救助活動をした方が効率的だと思います。先ほどのようにドアを開けてみたら、既に亡くなっていたというようなことはないかも知れません」

「まあ、その情報の信憑性はどうか、特に順番を決めている訳じゃないから、その人の言う順番通りに救助活動を試みよう」

先輩と云われた隊員は半信半疑に同意をした。賢はメモを渡して簡単に説明を加えた。一応隊員は納得した。3人が戻ると隊員達は暫く相談していたが、やがて賢の渡したメモを確認しながら、生存者の居ると思われる家のドアに向かって移動した。原と賢は野次馬を押さえている隊員のところに行って聞いた。

「ここ以外に、倒壊なんかで中に人々が閉じ込められている箇所をご存じありませんか？」

「我々は指示を受けて行動していますから、詳細は分かりません」

賢は仕方なく、空中浮揚で探すことにした。空中に浮き上がると、国道と思われる幹線道路が見えた。渋滞で車は全く動いていない。周辺の道路も畦の脇道も含め殆ど車で塞がっている。消防車がサイレンを鳴らしているが、道路が塞がっていて身動きできないようだった。山の手に通っている2本の幹線道路の内、街に近い側を走っている道路には車の影は無かった。それが東名高速道路だと分かったが、どこかで道路が決壊したのだろうと賢は思った。山の手側の道路は車で塞がっていて、酷い渋滞になっていた。それが新東名高速道路であるらしい。上空には沢山

のヘリコプターが飛んでいる。賢は近くにある病院に行ってみようと思った。一旦原の元に戻ると原に向かって言った。

「原さん、空中浮揚をやりましょう。一緒に意識を空間に保つようにしてください。原さんが一緒に浮揚できれば、このOVSは同時に持ってゆけますから」

「まだ、僕には自信がありません。先ず僕を病院まで運んでください。それからOVSを運んで頂くといいと思います」

賢は原の忠告に従った。2人は沼津市立救済病院のアプローチの植え込みの横に降り、賢は折り返し原団地に戻ってOVSを運んで来た。病院のアプローチはほとんど車で埋め尽くされていた。賢はそこに原を残して急いで病院の中に入ろうとした。しかし立ち入り禁止になっている。賢はやむなく透視で中を確認した。医者や看護婦が忙しそうに立ち働いている。階を替えて眺めてみた。どうやら患者達の中に怪我人が多発している模様だ。賢は看護婦達を集めて指示を出している女性の意識を見つめ、その心の動きを読んだ。

「みなさん、いいですか、患者さん達の怪我を治療するための薬品は不足しているのですから、怪我に対しては薬品を使わずに対応してください。外科の山路先生と真丘先生が執刀中ですから、薬品はそちらを優先しなくてはなりません。それと輸血用血液が不足しています。出血があった場合はできる限り早急に止血を試みてください。現在日本全国の病院に問い合わせています。こういう時期ですから、この病院に優先的に医薬品や血液を廻してくれるということは期待できません。くれぐれもそのことを考えて行動してください」

賢が原に言った。

「物質転送機を使いましょうか？」

「やってみますか？薬品を運ぶんですね？」

「それと、血液です。だけど、その前に物質転送機を信用させなくてはなりません。どの病院も我々に血液や薬品を委ねるなどという無謀な真似はしないでしょから」

「少量だったら、賢さんが運んじゃった方が早いんじゃないですか？」

「少量ならそうですが、多分いろいろなものが不足していると思うんです。リネンだって、処理業者に渡せないんじゃないかと思います。衛生上の問題が一番頭が痛いだらうと思います。先ず婦長に話をしてみます」
そう言うと、賢は病院の外科病棟の看護婦詰め所の前にテレポーテーションした。突然目の前に現れた賢を見て、ひとりの看護婦が絶叫して尻餅を着いた。看護婦達が集まって来た。

「こ、こ、この人がいきなりここにあつ、現れ、ま、ました」

「あなたは一体誰ですか？何しに来たんですか？」

婦長の金切り声が響いた。

「僕は、内観賢と申します。テレポーテーションでここに来ました。ここで薬品や血液が不足していると聞きましたので・・・」

「だ、誰が、そ、そんなことを言ったのですか？」

「あなたです。あなたの心を読みました。先ほど看護婦さん達を集めて、話されていたでしょう」

「*****」

看護婦達が呆然としている。

「僕が、必要としている薬品やそのほかのものをこの病院に送りつけます。現在、緊急の配送依頼をして引き受けてくれた病院や血液供給会社、薬品商社などがありますか？」

「あなたには関係のないことです。さっさと出て行きなさい！」

「あなたは、患者さん達のことを第一に考えておられないのですか？」

「何を失礼な！・・・私の独断では、どうにもなりません！」

「僕を信用されなくても結構ですから、依頼した機関と依頼した品物を教えてください。僕も最善を尽くして、それを届けるように努めてみます」

婦長は議論をしている時間が無いと言って、一人の看護婦に命じ薬局から注文品リストの写しを持って来させた。そして、そのリストの中で供給依頼先の内、距離的に不可能として印の付いている病院からの薬品と血液ならいつでも大歓迎だと言った。その言葉の裏で、「やれるものなら、やってごらんください」と思っていることが賢には読み取れた。それ

は北海道の札幌、旭川、釧路と鹿児島、沖縄の病院への依頼だった。それは他の病院や機関に依頼した分と重複していたが、婦長は「2重に入手できたらそれを他の病院にも廻せるし、これから大勢の負傷者が訪れることを想定して準備する必要があるので、多すぎるのは大歓迎します」と言った。賢はそのリストを手にする、原の元にテレポーテーションした。

「原さん、一度北海道に戻りましょう。ここのリストはいずれも北海道と鹿児島、沖縄など短時間で入手が困難な地域にある病院への依頼です。僕は先ず札幌の市立病院に行ってみようと思います。賢と原は来たときと同じ方法で賢の家のリビングに戻った。午後2時を回っている。賢は原をそこに残して直ぐにリストにあった札幌市立病院にテレポーテーションした。受付で話をすると直ぐに薬局長が出て来た。

「あなた、それは難しいですよ。ここから飛行機で羽田に送り、それからヘリコプターで運んでも、着くのはどう計算しても翌日ですよ。運送会社の特急便でも同じでしょう」

「一寸、別のやり方があるんです。少しお見せしましょうか？テレビ会議システムがありますか？」

「隣の部屋にセットできていますよ」

賢は直ぐに原に電話を入れて、SKYDIAを開き、薬局長の指定したアカウントを伝えた。直ぐに繋がった。原が画面に映っている。

「局長いいですか、今画面に映っているのは原という僕の友人で、由仁の家にいます。原から何かを送ってもらいます。よくご覧になってください」

賢は携帯位置情報端末の電源を入れて、それをその部屋の中央にあるテーブルの上に置いた。原が棚から小さな豚のぬいぐるみを取り出して、PCのカメラの前に翳し、薬局長にその映像を確認させてから、アクティブエリアにそれを置き、直ぐに物質転送機の電源を入れて、転送スイッチを押した。あっという間にぬいぐるみが携帯位置情報端末の横に現れた。局長は黙って頷いた。局長は直ぐに係の者に梱包済みの薬品と、血液を持って来させた。

「もう準備はしてあるのです。でも、発送の最終指示が来なかったの
どうなったのかと思っていました。今の機械の動作については不問に伏
します」

賢はお礼を言って小切手を書こうとした。局長はそれを制止して請求書
は沼津市立救済病院に送ると言った。賢は局長が渡してくれたダンボー
ル2箱を携帯位置情報端末のあるテーブル上に置いて、端末を取り除き、
SKYDIAで原にその様子を見せた。2、3秒で2つのダンボールは
消滅した。

「あなたは、どなたですか？これは事実なんですね」

そう言いながら薬局長は自分の頬をつねってみた。賢は礼を言うと、直
ぐにその場からテレポーテーションして趣味の部屋に移動した。そこ
には2つのダンボールが届いていた。賢は沼津市立救済病院の外科病棟の
看護婦詰め所の前の空間に意識を移した。そこは空白になっていて誰も
居ない。賢は原に言って自分が移動した先にこのダンボールを転送して
ほしいと言った。原は承知した。賢は看護婦詰め所の前にテレポーテ
ーションした。やはり透視したとおり誰も居なかった。賢は直ぐに携帯位
置情報端末をONして床の上に置いた。原に電話を掛けてOKと言うと、
間もなく携帯位置情報端末の横に2つのダンボールが現れた。丁度その
時婦長が姿を現した。

「婦長さん、約束通り札幌市立病院の薬局から、薬と依頼された血液を
持ってきました。確認してください」

婦長はあまりの驚きで顔がこわばり、紅潮している。

「札幌市立病院の薬局局長が、後でこの病院宛に請求書を送ると言っ
ていました」

婦長はただ頷いただけだった。ダンボールの封印を解いて中を確認した。
10種類の薬品と、3種類の輸血用血液が入っていた。薬品の種類は賢
には知らされていない。婦長は奥からリストを持って来て照合し「全て
揃っています」と言った。薬品が届いたのはこれが初めてで、他の機関
に依頼してある分は、渋滞や欠品などの理由で明日以降になるとのこと
だった。婦長の目に涙が浮かんでいた。

「ありがとうございます。あなたの名前は何とおっしゃいますか？」

「誰でもいいでしょう。こんなことはいずれ誰にでもできるようになるんですから」

賢はそう言うと、原の元にテレポーテーションした。

「賢さん、上手くいったみたいですね」

「ありがとうございました。原さん今日は少し疲れましたから、梓達が戻ったら少し休息を取りましょう。少ししたらもう一度出掛けましょう。原さんは大丈夫ですか？随分無理をされているようですが・・・」

「大丈夫ですよ。賢さんほど無理していませんよ」

そのとき玄関の呼び鈴が鳴った。賢は急いでリビングに戻った。

「奥様から、ご依頼承りました品をお届けに参りました」

それは、リネンのセットと、救急医療用品、保存食料、水などだった。業者が荷物を次々とリビングに運び込んで来る。リビングの空間がダンボール箱やリネンの包みで埋め尽くされた。

「梓もよくやってくれているな。原さん明日からこれらの品物を必要としている場所を探さないといけませんね」

「直ぐに分かりますよ。僕がネットで調べますから」

賢がコーヒーを入れて来た。2人はソファで休息を取った。2人は自分のコーヒーカップを持って、そのまま放心したようにじっとしていた。賢は自分が支援できなかった被災者のことを思っていた。できるだけ苦しみが少ないように祈り続けていた。コーヒーを飲み掛けた手を下ろしてコーヒーカップを受け皿に戻した。原は救助にどのように物質転送機とOVSを活用したらいいのかを真剣に考えていた。原も飲みかけたコーヒーのカップを口元に持ってゆかず、そのまま受け皿に戻した。

「賢さん、今日の救助活動は効率が悪かったと思いませんか。もっと迅速にできる方法があるはずですよ。場の交換がもう少し迅速に、そして正確にできるようになれば、物質転送機を直接救助に使えるはずですよ。物質転送とは謂っても、生体組織の情報を弄る訳じゃありませんから、身体に影響を及ぼすことはないと思うんです・・・・・・でも人体に対して、実験的なことはできませんから・・・・」

「原さん、何回か試してみましよう。問題なかったら、直接救済する方法を実施することにしませんか。現段階ではまだ危険です。これは失踪の時に起きた現象を自分で起こすことと同じことでしょう。心配なのは意識と心です。思考や感情は肉体と一緒に移動するでしょうが、意識と心は融通無碍でどこでも存在できますから、被災者の方の意識がどこにあるかで、転送後に自分自身に戻れるかどうかが決まってしまうような気がします。もし自分自身を失ってしまうと、どういう状態になるのか想像もできません」

「なるほど、その点を見落としていました。肉体が失踪したりテレポーションするときは、主体が意識を伴って動くから自分を失うことはないのですね。物質転送機が意識や心にどのように作用するか、意識や心が場と結び付いているかどうか分からないわけですね。もし意識が別の場にあると、転送後にリンクが切れてしまう可能性もあるわけですね」

「ええそういうことです。もう少し試験を続けましよう」

「分かりました。賢さん、ありがとうございます。さすがですね。そこまで考えが及びませんでした」

「動物の場合は、自由な意識も思考も持っていないでしょう。だから、転送が可能だと思うんです。人間は別だと思えますよ」

その時、入り口の扉が開いて梓と愛子が入って来た。愛子の元気な声が部屋中に響き渡った。

「賢パパ、原さん、ただいま」

「ただいまかえりました」

「お帰り、梓、随分買い込んだね」

「おかえりなさい」

「ええ、もう夜はかなり寒くなってきているでしょう。毛布とか、タオルを沢山買ったわ。あと生きるために必要なものも。だけど、どうやって送ったらいいのかしら？」

「僕が、ネットで調べます。賢さんがテレポでその場所に行って、僕たちが賢さんの居る場所にめがけて物質転送機で品物を送るんです」

「素晴らしいわ。是非拝見したいわ」

梓と愛子が2人で夕食の支度を始めた。原はインターネットで被災地の情報を確認してそれをメモに記入していった。賢は亜希子に意識を向けてみた。亜希子の意識は賢に向いていた。賢が語り掛けると直ぐに応答が返ってきた。

「亜紀、身体の具合はどうだ？正常に戻ったか？」

「あなた、ありがとうございます。わたくし随分回復いたしました。勿論、体重は直ぐには元に戻りませんが、でも、あなたに救って頂いたこの命、今度はあなたのために役立たせて頂きたいのです」

「そんなことは考えなくてもいいよ。それより、栄養を摂って身体の回復に努めなさい」

「はい・・・由宇お姉様がずっと一緒に居てくださっているのですよ。わたくしは本当に幸せです。由宇お姉様とお話しなさってください」

賢は意識を祐子に向けてみた。祐子からよろこびの感情が伝わってきた。

「あなた、ありがとう。亜紀が助かったのでわたしは嬉しくて、昨日からずっと亜紀の所に居るのよ。亜紀が指輪をくれたわ。あなたも持っているって。この指輪はどんなことがあっても外さないわ。私たちは3人で一人なのね」

「そうだ。3人で一人だ。祐子、少し言いにくいことだけど、日本の東海地方に大きな地震があったんだ。かなりの被災者があるようだ。日本時間の昨夜から今まで救助活動をしていた。一休みしたらまた出掛ける予定だよ。沢山の方が亡くなってゆく。亜紀が回復したら、支援をお願いしたいんだ。君にはフルマとブチがあるから無理だけど、亜紀には、回復を待つ僕と一緒に死者の道案内をして欲しいんだ。この1週間は救助活動に専念しようと思う。祐子から観て亜紀は回復しているように見えるか？」

「まだ、無理だと思うわ。最短でもあと2日くらいは休息を取った方がいいと思うわ」

賢が2人とのテレパシー通信を終えて意識をリビングに戻すと、ムクウが語り掛けてきた。

「賢、昨日から大変だな。肉体を酷使しているから注意が必要だ。今か

らワシが、お前と原智明にエネルギーを注入する。智明はPCに向かっているから、意識の流れの間隙を狙って注入する。お前は今から2、3分の間、意識を天空に据えて、無私、無念になっていなさい」

賢が瞑想状態に入ると体中が熱くなってきた。両掌、両足の裏、頭頂の5点が痺れるように感じて、一気に身体の中にエネルギーが入り込んで来るのが分かった。ムクウからの語り掛けで、賢は意識を戻した。

「賢、これでまた暫くは、頑張れるだろう」

「ありがとうございました」

「今日はマントラについて話そう。梓達が食事の支度を終えるまでに、要点を話すから集中して聞きなさい。マントラは自己を夢想、無念、無私に持ってゆく集中法として最も有効な手段だ。この世界には様々なマントラがある。それは過去の聖人や神秘家たちが、長い年月を掛けて見いだしてきた秘訣だ。最も根源的なマントラは「オーム」という発音を繰り返すマントラだ。このマントラだけで覚醒し、本来の自分自身に立ち返った者達も多い。この音が宇宙に遍満する元音に近い音だと言われている。しかし、それは真実ではない。それはあくまでイメージであって、本当は元音と謂うのは音ではなく耳で聞こえるものでもない。自分の内側から発せられるものだ。マントラには様々なものがある。前に説明した元極学では胎音に通じるマントラを用いる。そのマントラを繰り返すことで、人間の本来持って生まれた、無病、無私の状態が実現でき、本来の肉体と精神が得られる。そして、最終的には天・地・人の融合ができて、自分の意志がこの宇宙の意志に通じるとしている。そのマントラは「アン・ジン・ミー・ピー・ジー・パー・ヤー・イン・フォア・デイン」という10音で成っていて、人間の誕生の状態を再現させる。それは混沌状態から初めて生まれ出る時の状態に導く秘訣で、宇宙的な規模で観れば、太陽の燃焼や愛の発現と同じことだ。このほか、チベット佛教にもマントラはある。「オーム・マニ・ペメ・フーム」(Om Mani Pedme Hum) というものだ。これを唱えることで、観世音菩薩の慈悲の意識に到達できるとしている。オーム(Om)は宇宙の根源、マニ(Mani)は秩序と慈悲、ペメ(PADME)は知恵を表わし、フム(Hum)は分離

不可能なものを意味していて、全てが結合・調和して最終的な純粹意識に到達することを意味している。真言密教ではこのオームの初めの「オー」の部分で「オン」と発音して、その後には神仏の名前を唱え、最後にオームの「ム」の部分で「ウン」と唱えるマントラなどで仏への到達を祈念する。彼らは対象となる神仏とのチャネリングが始まると考えている。しかし、本当は自己の内部に神仏の存在を投影させて、その像と繋がることなのだ。それは、そのマントラの発声にあるのではなくて意念にある。ウパニシャッドで「秘密の教えの偉大なる「オーム」を弓と理解したなら、不断の瞑想で研ぎ澄まされた矢、即ち自分の身をそこにうがつべし。それ、つまり「オーム」で心を満たしながらその矢を引き絞り、おお美しき若者よ、その不滅なるもの「神」を的として射抜け。的は細心の注意を持って貫かれるべし。人は的の中の矢のごとく、ブラフマンつまり神、と一体となるべし」と解いている。[オーム]の発音Aは外的な日常的意識、すなわち現象界、Uは内的世界の意識・思考・感覚・欲望などで、Mは主・客未分化の無の意識と表現できる。この三文字の結合がオームなのだ。右脳は直感、総合的感覚、イメージ認識などを司っているが、ほとんどの人間は、論理的で局所的な思考、言語に翻訳した認識をしている。これは左脳の働きで、左脳に偏った認識に基づいた社会ができていく。肉体に限って観れば、マントラの連続的な念誦は左脳の働きを押さえる働きをする。しかし、本来思考は脾臓で行われているので、脳外科的な観点からマントラを観ると誤ってしまう。マントラの念誦は肉体的な効果より、自分の内面に向かうための道筋を作る働きの方が重要だ。内的世界の原点に一点を据えて、彷徨える思考や感覚をその一点に向かわせ、本来の自分自身に還る道案内をしてくれる。その効果として途中段階で、本来の生命力が顕現し、胎児の時に有していた自然治癒力が復活してくる。そして、最終的には自我を喪失させ、真我に至ることを可能にする。それでは、マントラはどのように発声すればいいのかだが、多くのマントラの語源は、サンスクリット語などのマントラを見いだした国の言語で発音する。特にインドでは古代から様々なマントラが唱えられてきた。釈迦は一部のマントラを除きマントラ

の念訣を禁止したが、これはマントラの誦呪が誤った形で行われると、意識の集中の結果、人間の機能がアンバランスに現れてきて偏差という異常を来す危険性があったからだ。釈迦の没後、後世の密教では再びマントラの念訣が行われるようになったが、それはあくまで秘伝として口伝されて、一般には公開されていない。そう言うと、マントラの発音は原語の原音に忠実でなければならないのかと思うかも知れないが、それは誤った認識だ。お前も知っているように、人間がある事項に意識を向けたとき、その方向に世界が動くのだ。だから、発声そのものより、その方向を意識して一点集中して念訣することが重要なのであって、発音自体はそれほど重要ではない。マントラはあくまで、自分の内面において音が発声し、それを内面で聞き、そしてそれが自分と一体となることが正しい念訣方法なのだ。しかし、だからといって、自由に発音してよいわけではない。開祖から伝授されたとおりに発音することが重要だ。そこに創始者の意識が作用しているからだ。自分で作り変えたり、何かを加えたりしたものは、別の方向を向いたマントラに変化してしまう。その結果、集中を欠くことになる。マントラの中には面白いものでは目の病魔を遠ざけるマントラがある。「シャブリリ・ブリリ・リリ・イリ・リ」、これを唱え続けることで、目から病根を遠ざけ、視力を回復する力を持つマントラとされている。これなんかも、正確に発音されることが要求される。日本の佛教の中では「ナム・アミダ・ブツ」や「ナム・ミョウホウ・レンゲキョウ」と唱えるマントラなんかがあるだろう。あれらは単なる念仏として、仏を崇めたり、利益を得るための意識で念じたりしているので、ほとんどマントラとしての意味も、効果も発現できなくなっている。マントラ自身はいかなる力も持ってはいないのだ。だから、方向性の意識の無いマントラは意味の無いもので、時には危険ですらある。何度も言うが、それは単に既に存在している諸力を集中させ、道を明確にする手段に過ぎない。あくまで正しい念訣を行うと、はその結果として自己の根源に至ることができるのだ。お前の考え方から云うと、この写された世界から抜け出して、本来の自己に立ち還る道案内をしてくれる手段なのだ。その過程で、本来の自己の持っていたあら

ゆる機能・・・まあ、俗に言う超能力が現れてくる。それは時空を超える能力に等しい。しかし、顕現する超能力を目的としてはいけない。そうすることで方向が捻れ、悲惨な結果を招くことになる。更にもっと悪いことは、顕現した超能力に執着して増上慢になることだ。それは一気に転落することを意味する。増上慢で鋭いピークを作ってしまうからだ。マントラについては大体理解できたか？お前は常に自分の意識の奥で、微かなマントラが響いていることを知っているか？意識が澄み切ったときに音に集中してみなさい。内面から来る微かな音が聞こえるはずだ。それが、お前を導いている元音だ」

「ありがとうございました。マントラについて、大体理解できました。子供の頃にスワミからひとつのマントラを教えて頂いて、それから、ずっと四六時中そのマントラを唱え続けました。初めは意味も分からなかったのですが、それはガヤトリーマントラだと言っていました。「オーム、ブル・ブワッ・スワハー、タット・サヴィトウール・ワレーニヤム・バルゴー・ディヴァッシャ・ディーマヒー、ディーヨー・ヨーナツ、プラッチョーダヤート」というマントラでした。暫くして、スワミはそれが「(宇宙の根源の音) オーム、天よ地よ空をあまねく貫くものよ、ああ、太陽 至高なるものよ。光輝と神の恩寵に瞑想します。どうぞ全てを見通す智慧をお与えください」という意味だとおっしゃいました。高校に入る頃になって、僕はそのマントラのことを意識しなくなってしまう。でも僕の意識の底にそれが響いているのかも知れません。今度、意識の耳を澄まして聞いてみます」

「スワミはお前にこの世界の真実を見抜く智慧を顕現させようとしていたのだ。それで今、お前はこの世界の元になっている真実の世界があると認識するに至ったのだろう。マントラの力はこの世界にいる限り、最も強い力の一つだ。誤った使い方をしてはいけない」

「よく理解いたしました。ありがとうございました」
まるで計ったように、愛子が賢を呼びに台所から出て来た。

「賢パパ、おまちどおさま。今梓さんが原さんを呼びに行ったよ」
中華料理が5品用意されていた。青椒肉絲、天津飯、雲吞スープ、麻婆

豆腐、海老チリソース。賢と原は感嘆の声を上げた。原もすっかり元気を取り戻しているようだった。4人は食卓を囲んで歓談した。梓が愛子連れて札幌市内を案内したとのことだった。愛子は、生まれて初めての北海道旅行だった。全てが新鮮で、「北海道の人たちに接することができて嬉しい」と何度も言った。暫く愛子の歓びに満ちた話に全員が同調していたが、やがて東海地震の話になった。賢と原はこれから深夜まで、救済活動に加わることにしていた。梓には月曜日から退社の最終日の前日まで休暇を取ると告げた。梓は了解して、自分はできる限り出社するように努めると言った。梓自身もその翌週末には退社することになっていた。食事を終えると、原が緊急の援助が必要な箇所を抽出して書き出した用紙を賢に見せた。30箇所以上あった。賢は仕事と家のことを梓に任せることにした。

賢と原は土肥のホテル高千穂館の前に居た。建物が海岸の岸壁の上に建っていて、海に突き出るような構造の本館の支柱が崩壊し、建物が傾いていて、ロビーはペしゃんこに押しつぶされ2階が地上階のようになってしまっていた。そのため、建物の中に入っただけの救助は危険すぎた。ホテルの中には53名の客が宿泊していて、その内自力で脱出できたのは27名だけで、残りの26名は建物の中に取り残されていた。その人達の生死は不詳で、救援隊はまだこの地に到着していなかった。原は40歳ほどのホテルマンから宿泊者のリストを借りた。ホテルマンは制服を着てネクタイを締めていたが、薄暗い中でも衣類が汚れワイシャツに血痕が付いているのがはっきり分かる。幸い怪我はしていないようだった。丸顔で浅黒い穏健そうな顔が、眉間に寄せた皺に陰鬱な苦しみを滲ませていた。

「赤い丸印が付いているのが救出された人たちです。これからどうしていいのかわかりません」

今にも泣き出しそうな表情でホテルマンは言った。賢はホテルの部屋全体に意識を向け、生存者を認識しようと努めた。しかし、混沌とした意識の集合は感じるものの、救助を求めている意識を捉えることは不可能だった。賢はホテルマンに聞いた。

「昨夜は宴会がありましたか？」

「はい、こちらに載っているお客様の半数近くが宴会に参加されていたと思います。昨夜はあの地震のあった時、多くのお客様がまだお酒をお召し上がりになっていたと思います」

原は持参したOVSシステムの電源を入れた。各階のそれぞれの部屋に照準を絞り、名前と照合して生存者の意識を探した。先ず丸印の付いていない客の部屋を探した。ホテルマンは不思議そうな顔をしてOVSを覗き込んでいた。原は上階から順次スキャン（走査）していった。しかし人名情報だけでは意識を捉えることはできなかった。

「どこか、夜遅くまで客が集まっている場所がありますか？」

賢が訪ねた。

「はい、地下1階にバーと宴会場がございますが、でも2階が地上階の上に重なってしまいましたから、そこがどうなっているか……」

賢は意識を地上階に移した。果たして、蠢くようにもがいている意識があった。意識が乱れ、交差していて何人居るのかは分からない。

「昨日の宴会は9時半頃終了なのですが、お客様はなかなかお開きになさらなかったのです。仲居が何度となくお願いしたのですが、皆さん随分酩酊されていたようで、飲み直すとおっしゃっていたようです。とは言ってもこの近辺には居酒屋やバーなどはありませんので、何人かのお客様は、多分ホテルのバーに向かわれたのだと思います。11時を回っていたと思います。仲居が「片付けが終わらない」とこぼしていました」

賢はホテルマンに聞いてバーの位置を確認し、その辺りに意識の照準を絞っていった。意識を研ぎ澄ますと、蠢いているように感じた意識の中に、苦しみもがいている意識があることが分かってきた。

「バーの近くに広い空間がありませんか？」

「はい、バーの外は吹き抜けになっていました。ロビーから地下に降りる4メートルほど幅のある階段があって、バーはその階段の下の部分に設けられていました。そのバーの隣が宴会場で、更に幅3メートルほどの廊下を奥に進むと、左手に男湯の入り口があります。男湯の浴場と更衣室が広い空間になっています。男湯の先、奥の突き当たりが女湯です。

男湯と女湯は同じ造りになっています。湯船から海が望めます。ですから、浴室、更衣室、宴会場、バーの前が広い空間になっています」

賢は思い切って、その階段の下まで入り込んでみようと思った。その時、OVSの反応に集中していた原が言った。

「賢さん、どなたかの意識を捉えられましたよ。一寸話してみます」

「もしもし、分かりますか？わたしはあなた方を助けに来ました。あなたの居る場所はどんな状況ですか？」

「い、痛い、とても痛い……真っ暗で何も……痛い……助けてください……」

原はホテルマンに言ってヘッドギアを被ってもらった。やがて画面に40歳前後の女性の顔が映し出された。目を瞑っている。ホテルマンが叫んだ

「昨日宴会をされたお客さんです！」

「あ、脚が、う、う、腕が……痛い、動けません……い、痛い……」

「バーの中に居るのですか!？」

「バー、バーってどこ？……みんな、宴会場……に居ます。真っ暗で、何も……」

女性の声が急に途絶えた。賢は懐中電灯を手にするると、意識を空中に据えて身体を浮揚させた。ホテルマンは放心したように賢を見つめている。賢はゆっくり建物の周囲を旋回し、出入りできそうな場所を探した。建物の中から湯気の立っている場所があった。湯船から海を望む大きな1枚ガラスが割れて、空洞が出来ていた。ホテルマンの話から察するとそこは男湯の浴場の位置だった。そこから中には入ってゆけそうだった。賢は懐中電灯を点けて、その空洞の中央を抜けてゆっくり中に入った。意識を次第に前方に進めてゆくと、更衣室に続く扉が破壊されずに残っているのが分かる。一旦扉の前で着地して扉を引き、歩いて更衣室に入った。真っ暗闇である。建物の倒壊が起こる危険性があるので、一步一步すり足で静かに前に進んで行った。途端に大きなものにぶつかった。それは人だった。賢は直ぐにしゃがみ込んでその人の意識を観た。既に

死んで硬直していた。その死体をまたごうとすると、頭が何かにぶつかった。いきなり空間が消えていて、コンクリートがその先に進むことを拒んでいた。どうやら更衣室の天井が半壊しているようだった。賢はそのコンクリートを辿って行った。急に空間が開けて左手に何段かの棚板のある場所に出た、その前の床に脱衣籠が散乱していた。それを取り除き脇に避けながら、その棚に沿って何とか前に進むと、棚が切れる辺りに扉があった。その扉は開かなかった。懐中電灯の光を当ててみるとトイレだった。トイレの中には人の意識は感じなかった。そこは部屋の隅だった。角を曲がって壁を伝って行くと、廊下からの入り口と思われる場所に出た。その周辺は崩壊していなかった。しかし入り口の引き戸は開かない。光を当ててみると、ガラスが割れている。そこを潜れば、廊下に出られるようだった。割れた大きめのガラスの破片を2枚取り除くとやっと廊下に出ることができた。廊下の天井は落ちていなかった。賢は胸を撫で下ろした。それから廊下を宴会場の方向に向けて、すり足で静かに前進して行った。沢山のスリッパが散乱している。左手に上がり框があり、木の床があって、部屋の入り口に襖が設けられていた。襖を開けてみようと思って引いたがびくともしなかった。襖は10枚ほどある。1枚1枚引いてみた。4枚目の襖を何とか引くことができた。少し力を入れて引くと、ガラガラと何か崩れた。賢は懐中電灯で部屋の中を照らしてみた。宴会場は天井が落ちたようだった。部屋の中央付近から奥に掛けては、崩落した瓦礫が部屋の中央部分を占領している。賢は宴会場に入る前に意識を全開にしてみた。確かにこの中から苦しみの意識が発せられている。その意識が苦しみなのか、何なのかははっきりしなかった。人影は全く見当たらない。賢は身体を空間に浮かせて静かに奥に入って行った。瓦礫を廻り込むように奥に進んで行くと、浴衣を着た何人かの人間が折り重なるように倒れているのが分かった。全部で6人居て3人が半身瓦礫の下敷きになっている。うめき声は聞こえない。賢は一人の倒れている人間の横に静かに着地した。酒と汚物が混じったような異臭が漂っている。辺りに割れた徳利や、ぐい呑みが散乱していた。仰向けに倒れている人に光を当ててみると、女性だった。厚化粧をして

いるようで、若いのか高齢なのか全く分からない。どうやらそれが先ほどOVSに映った女性のようにだった。女性は呼吸はしていたが気を失っているようだった。女性の腹部辺りにもう一人の人間が顔を当てるようにして、重なるように倒れていた。その人間は既に死んでいた。それは男性で下半身が瓦礫の下敷きになっている。頭の部分から血が流れ出した痕がある。賢は女性の頬を軽く平手打ちした。女性が目を開いた。賢の顔の方を見て叫んだ

「キャー、キャー、助けてえー……」

女性は動転したようだった。部屋は真っ暗闇で、その中に賢の姿がぼーっと浮かんで見えたのだ。

「地震があったんです。わかりますか？このホテルは半壊しています。あなたは助かったのです」

「い、痛い！痛いわ。脚が痛いわ！」

少し低いトーンの声だった。賢は既に死んで硬直している男の身体を引き上げて言った。

「さあ、前に這い出して、両手を使って前の方に抜け出してください」
女性は必死になって、両手で畳を押すようにして、死んでいる男の身体の下から両脚を引き抜いた。

「い、痛い、脚が痛い……」

賢は女性の浴衣の裾を上げて、関節とふくろはぎをマッサージした。

「少し待っていてください」

そう言うと賢はその先で倒れている人の側に寄った。俯せに倒れている。やはり女性だった。身体が小刻みに震えている。意識はあったが、言葉は発することができないようだった。もう一つの死体が女性の腰の辺りに抱きつくようにして硬直していた。死体の冷たさの影響か、女性の身体は冷え切っている。灯りを顔に近づけてみると、若い女性だった。目から涙が流れた痕がある。失禁していて周辺が濡れている。死体の男は腰から下が瓦礫の中に埋まっていた。幸い女性の脚は瓦礫の外にあったが、死体の重さで身動きができないようだった。身体が寒さと恐怖で震えていたのだ。賢は満身の力を込めて、硬直した男の両手を女性の腰か

ら引き離し、女性と死体の間に自分の身体を入れて、両腕と両足を畳に突いて踏ん張り隙間を作った。死体の身体がボキボキと音を立てた。

「さあ、早く、抜け出してください。さあ、早く」

ガラガラッと瓦礫が崩れかかる音がした。女性は必死になって前に出ようとしたが、身体が動かさなかった。賢は右手、両足で自分の身体を支え、左手で女性の腰を押すようにして前に押し出した。女性の身体が何とか死体から外れると賢は静かに死体の下から抜け出した。

「どこか痛いところはありませんか？」

女性は震える唇を噛みしめて首を横に振った。賢は意識を集中させて気を注入し、両掌を擦り合わせて熱くし女性の頬を暖めた。

「少し待ってください。まだ奥に人が居ます」

賢が女性のところから、その奥に倒れている人の近くに行くと、そこには男性2人が倒れていて、1人は瓦礫に挟まれていたが、意識はあるようだった。賢は意識のある男性に向かって言った。

「しっかりしてください。今助けますから」

男はやっと呼吸しているようだった。

「・・・わ、わたしは、斉藤といいます。わたしは、もう、駄目です。家に、小学生の息子が居るのです。よ、よろしく、お、お願いします」

「分かりました。安心してください。がんばって・・・」

しかしその言葉を残して男は死んだ。もう1人は瓦礫の下敷きにはなっていないが既に死んでいた。賢は急いで先ほどの若い女性のところに戻った。身体が震えている。危険な状態だと賢は感じた。賢は懐中電灯の明かりを消すと、急いで自分の服を脱いで裸になった。そして、手探りで女性の浴衣の帯を解き、前をはだけて、女性の身体を全身で抱きしめた。氷のように冷たい。賢は百会、労宮、湧泉のツボを全開し、そこからムクウの教えてくれたとおり、エネルギーを注入し、自分の身体を熱くした。女性の頬を擦り、両腕を擦った。暫くの間賢は必死に女性に気を注いだ。女性の身体は、脊髄や骨盤、大腿骨などの骨が凍り付くほど冷え切っていた。賢はよく生きていてくれたと思い、耐え抜いた苦しみに涙を覚えた。女性の身体はやせ気味だったので、骨の冷たさが直

接身体の表面にまで出ているようだった。賢は思い切り強く女性を抱きしめた。賢のぬくもりが女性の冷たさを凌駕したと感じたとき、女性が両手を賢の背中に回して、賢に抱きついた。2人は暫くの間抱き合ったままで居た。やがて女性の体温が戻ってきた。賢は女性から身体を離すと、女性の浴衣の前を合わせ、差し出してきた女性の手を握らせ、手探りで自分も衣類を身につけると、懐中電灯を点灯した。賢は女性の耳元で囁いた。

「もう大丈夫だね。誰にも分からないから、大丈夫だよ」

「ありがとうございます」

女性の声は囁くように小さかったが、柔らかな声だった。賢は先ほど、待たせておいた女性の近くに行った。

「お待たせしました。さあ、これから外に出ます。いいですか、2人とも、何も考えずに僕にしがみついでいてください。決して離れないように。目を瞑っていてくださいね」

賢が立ち上がったが、初めの女性は立てなかった。賢は女性の両脇を抱きかかえるようにして立たせ、自分の前面に抱きつかせた。女性は脚が痛そうだったが、必死に堪えているようだった。後の女性は直ぐに賢の背中に抱きついた。賢は一気に原の脇にテレポーテーションした。突然賢が2人の女性を伴って現れたことに、ホテルマンは仰天して腰を抜かしてしまった。

「ど、ど、どうなっているのですか？」

「テレポーテーションです。今は詳しく話せませんが・・・いずれ分かる時が来ます。今、男性の浴室の更衣室の中は天井が落ちていて、一人、男性か女性か分かりませんが亡くなっていました。それから、宴会場には男性が4人倒れて亡くなっています。この2人の女性をよろしく願います。僕はこれから、バーの方に行ってみます。廊下は崩落していませんから、バーの中を調べてみます」

原が言った。

「賢さん、3つの部屋にも生存者が居るようです。勿論怪我をして動けないようですけど」

「それは、どこの部屋ですか？」

「4階と5階の部屋です」

賢は原の示す部屋に順に意識を集中してみた。確かに人の意識がある。どうして先ほどはそれがはっきり感じられなかったのか不思議に思った。賢は建物の崩落の様子から観て、客室の方が被災者を救い出し易いと思った。賢は先ず、5階の525号室にテレポーテーションした。そこには老夫婦が居た。窓から入ってくる月の光に老婦人の放心した姿が浮き上がっていた。亭主の方は仰向けに横になったまま動かない。亭主は死んでいるようだった。賢の姿を見て老婦人は言った。

「喜寿のお祝いに、息子夫婦がお金を出してくれたのよ。おとうさんもとっても喜んでいたわ。お風呂も頂いて、美味しいご馳走もいただいたのよ。わたしも、おとうさんと一緒に逝きたかった。おとうさん、自分だけ一人逝ってしまって……」

涙を流しながら、吐き出すように言った言葉には力が無かった。賢は老婦人を哀れに感じた。

「きっとご主人は、奥様とご一緒にお過ごしになったことをお喜びになっておられますよ。奥様が、残された時間を大切に生きてゆかれることを、お望みになっておられますよ。奥様、先ず奥様からお助けいたします。ご主人は後でお連れいたします。どこか怪我はされませんでしたか？」

「はっと気が付いたら、主人が先に逝ってしまっていて、わたしは脚が痛くて、動かせなくなっていて……」

「痛いのはどこですか？」

老婦人は左足の足首を擦^{さす}って見せた。賢がそっと右手を当ててみると、細い足首が捻挫しているようだった。賢は両掌を炎症の起きている筋の上に翳した。そして、宇宙のエネルギーを自分の掌の労宮を通して老婦人の足首に注入した。5分ほど瞑想して、エネルギーの注入を続けた。

「さあ、奥様、少し立ち上がってみてください」

「あっ、立てます。痛みも無いです」

「奥様、僕にしっかり齧り付いていらしてください。今から、ホテルの

外に出ますからね」

老婦人がしがみついたのを観て、賢は一気に原の元に移動した。次は519号室だった。そこには妊婦とその亭主が居た。妊娠7ヶ月で、腹部がかなり目立つ。賢が部屋に現れると、亭主が身を挺して妻を守るような構えを取った。

「悪い者じゃありませんよ。あなた方を助けに来たのです」

「放っておいてください。妻は今動くと、流産してしまうんです。今まで3回も流産していて、もし今度流産すると、もう子供を産めないかも知れないし、母体も危ないと医師が言っているのです。地震でものすごい衝撃を受けましたから、もう駄目だと思ったんですが、助かりました。今は動かしたくないんです。ですから、僕らに構わないでください」

「この建物は地階の柱が砕けて2階が落ちたんですよ。今、2階が1階になってしまっているんです。いつこのホテル全体が崩落するか分からないのですよ。もし崩落してしまったら、あなた方だって助かる保証はないんですよ。勿論赤ちゃんだって」

「赤ちゃんの動きが分かるんです。それに、わたし、流産しそうな感じがあるんです。赤ちゃんを守りたいんです。わたしは動けません。どなたか分かりませんが、どうしたらいいか教えてください」

妻が、悲痛な訴えをすると、亭主も言った。

「何とか助かる方法はないでしょうか？3人とも助かる方法は？」

「テレポーションという方法があります。でも、それには、奥さんが先ず、流産しそうという感覚を放棄しなくてははいけません。その感覚が全てを危うくしているのです。それは思考から来ています。ここに僕がこうして現れたことを、運命として受け入れられれば、3人とも助かります。そして、赤ちゃんがしっかりと着床していて、臨月まで決して出て来ることはないと確信することです。その確信を持つ様に努力しますか？」

「勿論、おっしゃることを実行します。それで、そのテレポ何かは危なくないですか？」

「その考え方を捨てなくてははいけません。100パーセント僕を信賴し

て全てを委ねるのです。今3人で幸せに生きていること、これからもずっと幸せに生きてゆくことを確信するのです。たったこれだけのことで。できますか？奥さん、ご亭主、どうですか？」

2人はしばし黙り込んでしまったが、妻が言った。

「わたし、この方に賭けてみるわ。あなたもこの方の指示に従ってね。この子のために」

「・・・分かった。お前の言うとおりにするよ。生きるも死ぬも、3人一緒だ。地震に遭遇してもこうして生きているんだから、これからも大丈夫だろう、なあ」

「よかった。じゃあ、先ず自分の身体が完全で、臨月になったら丈夫な赤ちゃんが生まれてくるとイメージしてください。それから、いいですか奥さん、僕の手をしっかりと握っててください。ご主人は身体が大きいため、一度にテレポーテーションはできません。少し待っていてください。直ぐに戻って来ます。賢は妻を連れて、原の元にテレポーテーションした。そして、注意深く妻をそこに降ろすと、亭主の元に戻った。亭主は心配そうにして窓越しに外を見ていた。

「ご主人、次はあなたです」

「妻は、どこに行ったんだ？おまえ、悪魔じゃないだろうな？俺たちをたぶらかして、殺すつもりじゃないだろうな？」

賢は窓際に行って、ガラスの割れて落ちてしまった窓から下方を覗き見るように言った。

「目で見えるもの、手で触れるもの、自分で体験したものしか信じられないんですね。窓の外をご覧ください。あのエントランスの前に人が集まっているでしょう。あそこに、ご覧ください奥さんが居るでしょう」

途端に亭主はその場に平伏した。

「申し訳ありませんでした。ありがとうございます」

賢が亭主を連れて原の近くに姿を顕すと、周りにいた全員が拍手をした。その場には20人ほどの人間が集まって来ていた。このビルの崩落が噂になって伝わり、救援に駆け付けた人たちだった。先ほど救助された2人の女性はホテルの車で近くの病院に急送されていた。もう一つの部屋

は411号室だった。部屋の中には誰も居なかった。荷物も無かった。賢は咄嗟に部屋を飛び出すと、非常階段を探して、階段に入る扉を開けた。階段は真っ暗闇である。賢は大声で呼び掛けた。

「誰か居ますか？階段を下りていますか!？」

階下の方角から返事が返ってきた。

「どこですかー!?今、下に向かって降りています！」

「直ぐに、その場に止まってください！危険です！」

賢は大きな振動を与えないように注意しながら、急いで階段を下りた。3階から2階に向かう途中で夫婦を捉えた。懐中電灯の光で見ると、50歳前後の夫婦だった。2人とも旅行鞆を手にしている。賢が聞いた

「どうしたのですか？」

「何とか自力で逃げ出そうと思ひまして・・・」

「どうして、昼間脱出しなかったのですか？」

「妻が失神していて、何とか意識が戻るように看病していました。漸く意識が戻り、落ち着いてきたので・・・」

「そうですか。この下は2階が崩落して、直接1階のロビーになってしまいます。どういう壊れ方をしているか分かりませんから、3階まで戻りましょう」

賢は懐中電灯を亭主に渡しその場で待つように言った。亭主は不安そうだったが、賢は先ず妻を救助し直ぐに亭主の元に戻った。しかし亭主の姿は無かった。ほんの2、3分の間のことだった。余震が来た。建物がガタッと音を立てて傾いた。賢は呼び掛けてみた。

「ごしゅじいん、どこですかー!？」

応答は無かった。賢は感覚を集中して辺りを見廻した。階段の下方から僅かな光が見えた。亭主は階段を降りたようだった。賢は急いで階段を降りて行った。光の無い暗闇の中を進むと、突然上方から垂れ下がっている鉄筋に頭を打ち付けてしまった。賢は足もとを狂わせ、階段をずり落ち始めた。暫くずり落ちると今度は踊り場のような所に放り出された。そこに懐中電灯が落ちていた。賢はそれを拾い上げた。周りを照らすと、亭主もそこに横たわっていた。賢と同じような経過を辿って落ちて来た

ようだった。賢は亭主を抱きしめて、一気にテレポーテーションした。妻が心配そうにして待っていた。亭主は意識朦朧としていた。賢はホテルマンに頼んで車で2人を直ぐに病院に搬送して貰った。賢は思った。「やはり、1人だけ取り残されると一層不安が募ってくるようだ。冷静な判断ができなくなるんだ」

このことは賢にとって大切な収穫だった。原がホテルマンとふたりで、宿泊客名簿を使って地下のバー付近を一人一人OVSで追跡していた。原が言った。

「26名の内、既に所在が確認されたのは13名です。その内で亡くなった方も分かりました。残りは13名ですが、先ほど助かった女性の話で、その内5名が宴会場の崩落した天井の下敷きになっているようです。OVSでは生命反応がありません。多分無理だと思います。賢さん、後は8人ですが、バーに居るか確認してみましたが、生命反応として5人しか確認できませんでした。もう、OVSではこれ以上捜しようがありません。ホテルの従業員は先ほど男子更衣室に居た人、それから女子更衣室に居たと思われる人、フロントの受付に居たと思われる人2人、バーに2人、それに仲居さんが一人の合計7人が不明です。生死が確認できたのは、賢さんが見つけた男子浴場更衣室の一人だけです」

賢は直ぐに宴会場の前の廊下にテレポーテーションした。ホテル全体が先ほどより更に、宴会場方向に傾いている。賢は滑らない様に注意しながら進んでいった。バーの近くにはシャンデリアの破片や絵の額などが散乱していて、フロントに続く階段にはロビーの天井が崩落した影響で廊下まで瓦礫が雪崩れ込んで来ていた。バーの入り口前には階段の欄干が落ちて入り口の扉を塞いでいた。賢は懐中電灯の光をあちこちに当ててバーの扉を開く方法を考えた。よく見るとバーの壁にはステンドグラスのように色付けされているガラス窓があることに気付いた。賢はそのガラス窓を割ろうと考えた。それを割れば人一人は通り抜けられそうだった。賢は廊下に散らばっているシャンデリアのデコレーション用の金具を拾い上げ、それを振り上げてカー杯ガラスを打ち付けた。ガラスが割れた。ガラスの表面にビニールのシートを貼ってステンドグラスにし

であったので、破片は飛散しなかった。賢は丁寧にガラスを取り除いた。それから空中に浮揚し、身体を横にしてバーの中に入り込んだ。バーの中も瓦礫の山だった。5人が怪我をしていた。全員酔いが覚めて、放心したようになっていた。アルコールの臭いが充満している。尿の臭気が鼻を突く。賢が大きな声で呼び掛けた。

「皆さん、助けに来ました！返事できる方は応えてください！暗闇ですから、番号を言ってみてください！」

「いち」

誰かが大きな声で叫んだ。

「に」「さん」「しー」「ごっ」「ろく、なな」

かけ声が續いて、七人が居ることが分かった。声は元気なようだった。

「皆さん、これで全員ですか？」

誰かが応えた。

「いいえ、マスターとママを入れて、10人でした。笹本と長泉と櫻川が死にました。だから7人です。もう一人横手川が危ない……おい、しっかりしろ！」

「皆さん、外に出ようとしなかったのですか？」

「崩落していることが分かりましたから、わたしが止めました。助けに来てくれるのを待つことにしました。糞尿は垂れ流しで耐えて頂くようお願いしました。食料は多少ありますから、1週間ぐらいは生きられると高を括っていました。でも、皆さん怪我をされているんです。亡くなってしまった方々は天井から落ちて来たコンクリートで頭を打ったのです。あなたがいらしてくれて助かりました」

よく見ると、バーの入り口の扉付近の天井が崩落していた。その付近のソファに座っていた3人が頭にコンクリートの直撃を受けたようだった。全員酩酊していたので、マスターの指示で行動していたのだった。賢は横手川の処に行った。ソファの上に横になっていた。

「苦しいですか？」

「背、背中が……くっ、苦しい……もう、だめだ」

「駄目は、コウモリの目、目のない者の目、駄目なことはいんです。

これから、直ぐに回復します。じっとしていて」

賢は横を向いている横手川の浴衣の帯を解き、襟から右手を差し入れて、背中を静かにスキャンしてみた。肋骨が2本折れている。賢は意識を集中して折れた肋骨の位置をゆっくり元の位置に戻し、筋肉に働きかけて折れている骨が動かないように固定させた。横手川は少し楽になったようだった。肝臓と膵臓も衝撃を受けていた。酷く腫れている。賢は両方の臓器の上に順に手を当てて、機能を安定化させた。それから暫くの間、横手川の背中からエネルギーを注入した。やがて横手川は起きあがるようになった。賢はテレポーテーションで先ず横手川を搬出し、続いて一人ずつ運び出した。7人の救出が終わると、賢は再び宴会場に戻ってみた。瓦礫の下に居る5人に意識を繋ごうとした。しかし、生命反応は感じられなかった。賢は敢えて幽界には入り込まず、諦めて女子浴場の更衣室に向かった。浴室のタイルの上に裸の女性が仰向けに倒れていた。窓ガラスが粉々に吹き飛んでいて、タイルの上一面に飛び散っている。女性も頭と右腿から血を流していた。血は既に止まっていた。女性は微かに息をしていた。湯船から湯が流れ出してくる女性を温め続けたのが幸いしたようだった。賢は女性を抱き上げ、滑るタイルに細心の注意を払いながら更衣室に入った。ホテルの仲居の衣類が籠に入れられていた。女性はやはり従業員だった。賢は女性を長椅子に横たえようと、籠の中からタオルを取りだし、女性の身体を拭い、衣類を着せた。女性はぐったりしていたが、賢の存在に気付いて頭を起こそうとした。

「わ、わたし、どうしたのかしら？」

「浴場のタイルの上に倒れていましたよ。怪我は頭と、腿と・・・」

「腰を打ちました。地震で倒れたとき、ガラスが飛んできて・・・ああ、恐ろしい・・・わたし助かったんですか？ああ、神様」

賢が女性を連れて戻ったときには既に救急車が、賢の戻るのを待つて待機していた。女性は直ぐに病院に運ばれた。そこで賢はフロントのカウンターに意識を移してみたが、生存者は居ないようだった。原はホテルマンに言って、OVSで幽界に彷徨っている存在を確認してもらった。果たして、フロントの2人の従業員は落命していた。最後の一人の従業

員の所在はどうしても確認できなかった。賢と原がどうしようかと迷っていると、ホテルマンが大声で言った。

「青木さん、助かったんですか？」

女性が表通りからエントランス方向に向かって小走りでやって来た。

「わたし、少し頭が痛くって早じまいしたんです。皆さんがわたしのことを心配しているかも知れないと思って出て来ました」

「ああ、よかった。青木さん、あなたは幸運な方です。ご自宅は大丈夫でしたか？」

ホテルマンがヘッドギアを外しながら聞いた。

「はい、タンスやテレビが倒れただけで済みました」

賢と原は安心した。周囲に集まっていた人たちが、住所や名前を聞いたが、賢も原もにこにこ笑っているだけだった。2人はホテルの関係者に挨拶をすると、次の地域に移動しようとした。既に12時を回っていた。

2人にも疲労感が押し寄せていて筋肉が固く腫れ上がっていた。賢は「今日はここまでにしよう」と言った。2人は一旦北海道に戻ることにした。賢はまずOVSを札幌に運び、直ぐに戻って来て原の前に現れた。ホテルの前に集まっていた人たちは神々しい存在を拝する様な気持ちになっていた。中には正座して合掌している者もあった。ふたりは両手を握り合った状態で人々の眼前から消えた。

ふたりが同時にリビングに姿を顕したので、梓と愛子が手を叩いて喜んだ。

「あなた、原さん、お疲れ様でした。お疲れになったでしょう？」

「賢パパ、原さん、ご苦労様」

「何だ、ふたりとも先に寝ていればよかったのに」

「ずっと地震速報を観ていました。そう、さっき遠野の野岸ゆきさんから電話がありました」

賢は直ぐにスマホを取り出しゆきに電話をした。

「夜遅くにごめんなさい。今帰ったばかりなんだ。ゆきさん？どうしたの？何かあったの？」

「いいえ。賢さん、わたし賢さんが心配になって電話しました。昨夜、

賢さんが悪い人たちに狙われていて、大けがをした夢を見たのです。わたしだけなら、たかが夢と思ったでしょうが、母も似たような夢を見たのです。母は狙われたのが賢さんかどうか分からなかったって言いますが、悪い人たちが何かのプロジェクトのことを話していた様なのです。それで賢さんのことかも知れないと思いました。わたし心配で心配で、思い切って電話しました」

「よく、電話番号が分かったね」

「携帯電話が通じないので、東京の本社に電話したら北海道に転勤になったと言われました。それで、総務課の人に従姉妹だと嘘を吐いちゃいました。ごめんなさい。そしたら、その人がお住まいの電話番号を教えてくださいました。何か変わったことはありませんでしたか？」

「ゆきさん、心配してくれてありがとう。だけど、何事もなかったよ」賢は康子を囮にして、襲撃されたことは口にしなかった。ゆきに心配を掛けたくなかった。

「ごめんなさい。わたし、心配性で・・・あっ、少し待ってください。母が電話に出たいと言っています」

「もしもし、孝子です。その節は本当にありがとうございました。ゆきがどうしても電話したいと申しますので・・・お疲れのところ、こんなに遅くにお電話頂いて恐縮です。内観さん、お気を付けになってください。わたし時々夢で、出来事の予告を受けることがありますので、心配になって・・・何でもなければよろしいのですが・・・」

「ありがとうございます。注意するようにします」

「あっ、それから、内観さんでしょう？あの富士市、沼津市の団地や病院でのスーパーマンのような活躍は。わたし、キャスターの解説を聞いていて分かりました。あなですわね。私たちをお救いになったように、東海地震の被災者の方々をお救いになっていらっしゃるのには」

「はい、僕と原さんも協力して救助活動を支援しています。他の人には話さないでください」

「ありがとうございます。私たち苦しんでいる者をお救いになってくださって・・・どうぞお気を付けになってください」

孝子の声が震えていた。電話を切ると梓が言った。

「あなた、ニュース解説であなたと原さんのことが取り上げられています。危険を承知で、救助活動をされているんですね。気を付けてください。あなたはあなた一人のあなたではないんですから」

翌日も朝から、賢と原は被災地に向かった。ふたりが救出に出掛けると、梓は昨日のうちに帰り支度を済ませてある愛子に乗せて、直ぐに札幌市内に向かった。愛子が札幌にあるバレエスクールを訪問することになっていた。愛子から札幌に出掛けるという話を聞いて、雲井がバレエスクールを経営している友人に電話してくれたのだった。愛子を札幌の駅の近くにあるバレエスクールに降ろすと、梓はそのまま出社した。既に康子も出社していたが、朝の挨拶を交わしただけで康子は直ぐに席を立ててしまった。碧瀬と須崎はいつものように直ぐに外出してしまった。梓は1人席に残され、電話対応に追われた。本社では既に賢が退職願を出したことがMIプロジェクトのメンバーの間に知れ渡っていた。本社のプロジェクトの関係者から、梓に問い合わせの電話が鳴り続けた。その多くは、MIプロジェクトの方向性に関する内容であったが、質問者はV S館の建設に絞り込んだ会社の本音を知りたがっていて、賢が左遷され、退職にまで追いやられたことを意識しながらも、トップの方針を伺う日和見的な見方から抜け出せず、奥歯に物の挟まったような言い回しで質問するのだった。梓も直接トップを批判するような返答は避けて、ただ退職の理由は賢の一身上の都合であり、MIプロジェクトの方向性はトップの方針に従うのが当然だという受け答えをした。昼前に楠木からも電話が掛かってきた。

「北海道支社企画部の田辺です」

「もしもし楠木です。田辺さん、内観リーダーはどうしても辞めるのでしょうか？」

「楠木さん、私はそう思いますよ。もう内観リーダーが会社に留まる理由はないと思いませんか？完全にリーダーを除外するか、その活動を封じ込める様な動きになっているでしょう？それに内観リーダーの提唱していた路線は取り止めになるし、こういう状況に追い込まれたらどんな

人でも辞めざるを得ないと思いますよ」

「そうでしょうね。でも我が社の中で精神改革の理念を持ってプロジェクトを推進できる人が内観リーダーの他に居ると思いますか？」

「我が社にそういう人物が居るかどうか、それは分かりませんが、少なくとも私はそういう人物を知りません。もともと、従来の業務を人間関係の中で上手くこなしてゆく人は山のように居るでしょうが、誰もやったことのない事業を展開しようとするとき、それができる人はごくごく少数に限られると思います。全てが思う通りにゆくはずはなく、紆余曲折があるのが当然で、その方の脚を引っ張ったり、粗探しをしたりするようなことがあったら、いくら才能のある人物でも活動できなくなってしまうと思います」

「そうですね・・・一寸小耳に挟んだんですが、田辺さんも退職願を出されたとか・・・」

「ええ、私も今月いっぱい退職します。もう社長に受理されました」

「田辺さんは、そんな酷い仕打ちを受けたようには思えませんが・・・」

「私は、両親の面倒を見なくてはならないので・・・」

「そうですか・・・今後どうしたらいいのでしょうか？」

「もう動き始めた船ですから、後は目的地に向かって精一杯推進するべきだと思います」

「実は、V S 館の集客力が期待したほど伸びそうにないのです。ご存じだと思いますが、北海道を初め、九州も、四国も、住民からあまりいい反応を得られていないのです。どうやって気運を高めたらいいのか苦慮しています」

「はい、確かに北海道の住民の反応はあまりよくありません。元々精神改革というフレーズには環境政策の様なはっきりとは捉えにくい響きがありますから、一般の人には難しいのだと思います。内観リーダーが言っていたように、このままではアメリカの二の前になり兼ねません。彼は事前に何か起死回生の対策を打つべきだと考えて、あのような試行サイトの立ち上げを考えたのだと思います」

「何かいいアイデアがあったら、教えてください」

「WEBを上手く活用する方法を真剣に検討されてはいかがですか？そこに活路があるような気がします。楠木さんもそのことを検討されていたのでは？」

「新しいサーバーシステムを構築しようとしたのですが、予算の関係上、ホームページを開設する程度のことしか出来そうもありません。でも、ホームページの中で面白いコンテンツを展開しようとは考えていますが・・・」

電話を置くとき梓はため息を吐いた。この日の午後、梓は愛子を空港に送る為に年休を取ることにしていた。

東海地震の被災地における賢と原の活躍が日本中に知れ渡っていたので、東領製作所やMIプロジェクトに関係した企業内では一部に、救助活動を行ったのは賢達で、賢の退職の理由が、被災者の救済と関係しているのではないかという噂が流れた。賢たちの救助支援活動は思いも寄らない宣伝効果を生み出した。ニュースの映像などで、原の操作しているOVSが映し出され、既にOVSを購入している者達から、機能についての問い合わせが殺到していた。ウチミシステムズのサービス部門はその対応に追われた。それと同時にOVSの潜在的な能力が知れ渡ることになり、様々な分野からの引き合いが生まれ、売上げが急上昇して来た。生産能力の増強の為に、生産関係者は資材調達と臨時従業員確保に東奔西走しなければならなくなった。

愛子はバレエスクールの入り口が開くまで待っていた。入り口に「開校時間 午前9時～午後7時」と書いた立て看板があったので、1時間待つつもりでいた。しかし、8時少し前に一人の年輩の女性がやって来た。

「もしかして、あなた内観愛子さんかしら？」

その女性が言った。やや大柄だが、背筋がすっと伸びて凛とした雰囲気漂わせている女性だった。

「はい、内観愛子です。雲井先生からご紹介頂きました。よろしく願いいたします」

「私は絹原麗子です。雲井さんとは旧来の友達なのよ。あなたがお見えになると伺ったので、今日は少し早めに来てみたのよ。お待たせしてしまったかしら？」

「いいえ、私も先ほど来たばかりです」

「そうなの、それはよかったわ。どうぞ中にお入りになって」

そう言いながら絹原は入口のドアの鍵を開けた。中に入ると、愛子はふんわりとした暖かい空気に包み込まれた。

「人が居なくても暖房しておくのですか？」

「ええ、そうなの。北海道は寒いでしょう。直ぐには暖かくなならないのよ。それに、冷えた空気を暖めるより暖房を継続した方が経費的にも安上がりなのよ。最近の暖房システムは、一定温度を保つのに最低限のエネルギーで済むようにできているのね。以前よりずっと暖房費用も少なく済むようになったわ。さあ、上がってちょうだい」

「はい、失礼します」

「愛子さん、雲井さんから伺ったんだけど、あなたロシアに留学するんですってね。ロシアはここよりもっと寒いわよ」

「はい、覚悟しています」

「勉強はどうするの？」

「あちらの日本人向けの高校に入学しようと思っています」

「あなた、将来はプロを目指すの？」

「まだ、よく分かりません」

「いろいろな道があるのよ。あまり限定的に決めない方がいいわよ・・・一寸こっちに来て、踊ってみて頂けるかしら？」

「はい、着替えはどちらで・・・」

「ごめんなさいね。この奥が更衣室で、その奥がレッスンの教室になっているわ。一緒に行きましょう」

絹原は愛子を連れて更衣室に入った。愛子は驚いた。東京のスクールの倍以上のスペースがあった。周囲に沢山のロッカーがある。部屋の中には4脚の長椅子があって、そこでトウシューズを履けるようになっていた。愛子は着替えを済ますと、絹原に言われて端のロッカーに荷物を取

めた。愛子がトウシューズを持って来ていることに絹原は満足していた。着替えが済むと絹原は愛子を連れてレッスンルームに入った。かなり広いスペースだ。東京の1.5倍はある。

「あなた、ジゼル踊ったことあるかしら？」

「はい、雲井先生に教えて頂きました。まだ3回しか踊ったことはありませんが……」

「やはり、そうなのね……ねえ、私とペアを組んでジゼルとアルブレヒトの踊りを踊ってみてくださる？」

「私のような初心者とですか？私はまだ真似事しかできませんが……」

「それでいいのよ。わたしはアルブレヒトを踊るから、あなたベゼルを踊ってみて」

「よろしいのでしょうか？私なんか先生と踊らせて頂いて……」

「雲井さんが、あなたのベゼルが好きだと言っていたので、是非一緒に踊ってみたいと思ったの」

絹原が音楽の準備をし、ふたりはスタンバイした。踊り始めると絹原は真剣になってきた。愛子の動きの軽さが絹原の胸を打った。どんなに高く飛び上がっても、着地の時トウシューズからは全く音がしない。絹原の目に涙が浮かんできた。愛子は必死に踊った。ジャンプするときは意識を空間に誘導し、着地は静かに行うことを意識した。常に心の中にベゼルの愛と悲しみを描くことを意図して踊った。踊り終わると絹原は愛子に言った。

「あなた、素晴らしわ。どうしてそんなに軽く飛べるの？わたし、アルブレヒトになってしまったような気がしたわ。あなたに恋をしてしまいたいそう」

「先生、そんなにお褒めにならないでください。私は飛ぶのが好きなんです」

「あなた、ロシアに行くの、もう一度考え直すことできないかしら？私の処に来られないかしら？私のスクールにもロシアの先生が居るのよ。その先生からも教えて頂くといいわ。私は貴女の踊りが好きになってしまったのよ」

「そんなに言って頂けて光栄です。私、雲井先生と相談してみます。実は父が転勤になって札幌に住んでいるのです」

「それは好都合じゃないの」

絹原は愛子と一緒に白鳥の湖も踊ってみた。所々で止まり、その都度褒め言葉や注意すべき点などを愛子に伝えた。9時を過ぎると生徒達が三々五々やって来たが、絹原は指導教官達に生徒達のことを任せて、愛子に懸かり切りになっていた。生徒達は絹原の熱の入れ様に驚いているようで、レッスンの合間にはじっと愛子の動きを見つめていた。

午前の業務を終えると、梓は席に戻っている康子に声を掛けた。

「雪坂さん、一緒にお昼に出ましょうか？」

「済みません、私、支店の総務の仲間と約束してしまいましたので」

康子に断られて、梓は康子がよほど腹を立てているのだと思ったが、暫くはそっとしておこうと思いそのまま退社した。バレエスクールに寄ると愛子が外に出て待っていた。絹原が愛子の横に立って、ふたりで話している。梓は車から降りて絹原に頭を下げた。

「お世話になりました」

「いいえこちらこそ、愛子さんの様な素晴らしい方にお逢いできて喜んでます」

「愛子さん、いろいろ教えて頂いたの？」

「ええ、とっっても勉強になりました」

梓と愛子はもう一度礼を言って絹原と分かれた。

「おまちどおさま、愛子さん、飛行機の時間までには時間があるでしょう、美味しい店に連れて行ってあげるわ」

「梓さん、ねえ、ねえ、もしかしたら、わたし、ロシア留学止めるかも知れない。ここに来ちゃうかも」

「ええっ？」

「絹原先生が、是非いらっしゃっておっしゃってくれたの」

ふたりは蟹料理の店に行った。愛子は喜んだ。食事が済むと梓は愛子と共にそのまま空港に向かった。

この日、賢と原のふたりは原の調べた情報に基づいて焼津に空中移動した。焼津の海岸線の住宅が周辺の崖崩れで孤立しているとのことだった。WEBの情報では、孤立した35棟の住宅の内の14、5軒が倒壊していて、救助隊も接近できない危険な状態にあるとのことだった。ヘリコプターの救助隊の出動を待っている73名の住民達の安否が気遣われていた。ふたりは一旦焼津の公園に降り、そこから再び空中浮揚して、状況を確認しながら目的の被災地に向かった。遮断された道路の先にある広い畑の畝に着地すると、そこは3方を山肌に囲まれた窪地で、その区域に出入りできる唯一の道路が崩壊しているのだった。ほとんどの家々は山肌に沿って建てられていて、その内東向きの切り立った崖が崩落していた。その土砂で10棟ほどの住宅が押し潰されている。崖より離れたところに建っていた家々も、どれも古く倒壊せずに持ち堪えた家は僅か3棟に過ぎなかった。賢と原は畑の畝に置いたOVSを持って、崩落している家々の近くまで移動した。その場にOVSを置くと、原は直ぐに生存者の確認をするために電源を入れた。そこは海岸に近かったが、波の音は山肌に遮られて全く聞こえない。地域全体がまるで死んだように静まり返っていた。賢は聴覚を全開にしてみた。ぼそぼそと話す大勢の人たちの話し声の中に、いくつかの泣き声が聞こえてくる。賢はその声の方向にフォーカスした。その泣き声は崩落した家の中から聞こえていた。その時また余震があった。崖が再び崩落して半壊だった2棟の家を押しつぶした。原はOVSをどう使おうかと思案していたが、突然立ち上がると無事だった家に向かって駆け出して行った。賢は空中浮揚して、泣き声のする家の方向に向かってゆっくり滑空して行った。声は崖の下の土砂に押しつぶされた家の中から聞こえていた。賢がその家に近付くと、果たして大勢の年寄り達が、落ちてきた土石で押しつぶされた家の近くで、崩落した家の隙間から中を覗いたり、項垂れて地べたに座り込んだりしている。賢は地上に降りると、蹲っている腰の曲がった老婆に聞いた。

「中に大勢居るのですか？助けられそうですか？」

「わりや、なに言ってるだあ、できりや、おら、とっくにやってらあ、わりいこたあ言わにやあで、よしとけー」

賢は、この人達も救い出したい一心なんだが、危険で近づけないのだということを知った。直ぐに自分が中に入ることに意を決した。泣き声の聞こえる位置に焦点を絞って中を透視した。柱が折れ、土壁が崩れて内側に倒れ込んでいる。土壁の下敷きになっている人が眉間に映った。老婆だ。老婆の近くには液晶テレビが転倒している。そのテレビの周囲は倒れた木片や壁の漆喰などで埋め尽くされていた。裏返しになった50インチほどの液晶テレビの上に空間があるようだった。賢はその場で一旦前屈みに身体を丸め、その姿勢を維持したままテレポーションでテレビの上の空間に移動した。目測は誤っていなかった。老婆は泣いていた。腰から下を泥壁に押しつけられている。賢は言った。

「頑張ってください。今助けます」

「わりや、おらのこたあええ、じいさんを助けてくりよう。おーいおーいおーい」

自分が苦しくて泣いているのではなかった。老婆は夫を気遣っているのだった。賢は周囲に対して意識を全開にしてみたが、老婆以外に生命反応は感じなかった。

「分かりました。まずおばあさんから助けます」

賢は土壁を持ち上げた。家がみしみしと音を立てた。背中に土壁を当てて押し上げ、両手に力を込めてやっとのことで老婆を引き抜いた。賢は家が崩れないように、静かに土壁から身体を抜いて、土壁を下に降ろした。そうしておいて、老婆を抱きしめると一気に元の場所にテレポーションした。賢が老婆を連れて地面に降り立つと殆ど同時に大きな音を立てて、家が崩れ落ちた。

「わりや、じいさんはどこだ、おらをたすけりや、あんていもたすけられたら、なあ、さー、なあ・・・おーいおーい」